

42228

教科書文庫

4
810
42-1926
200030 1729

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

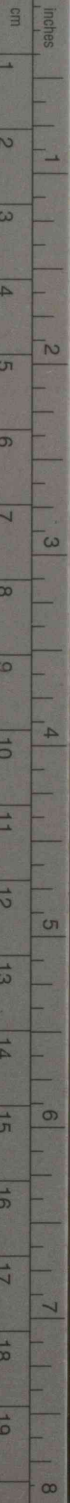


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

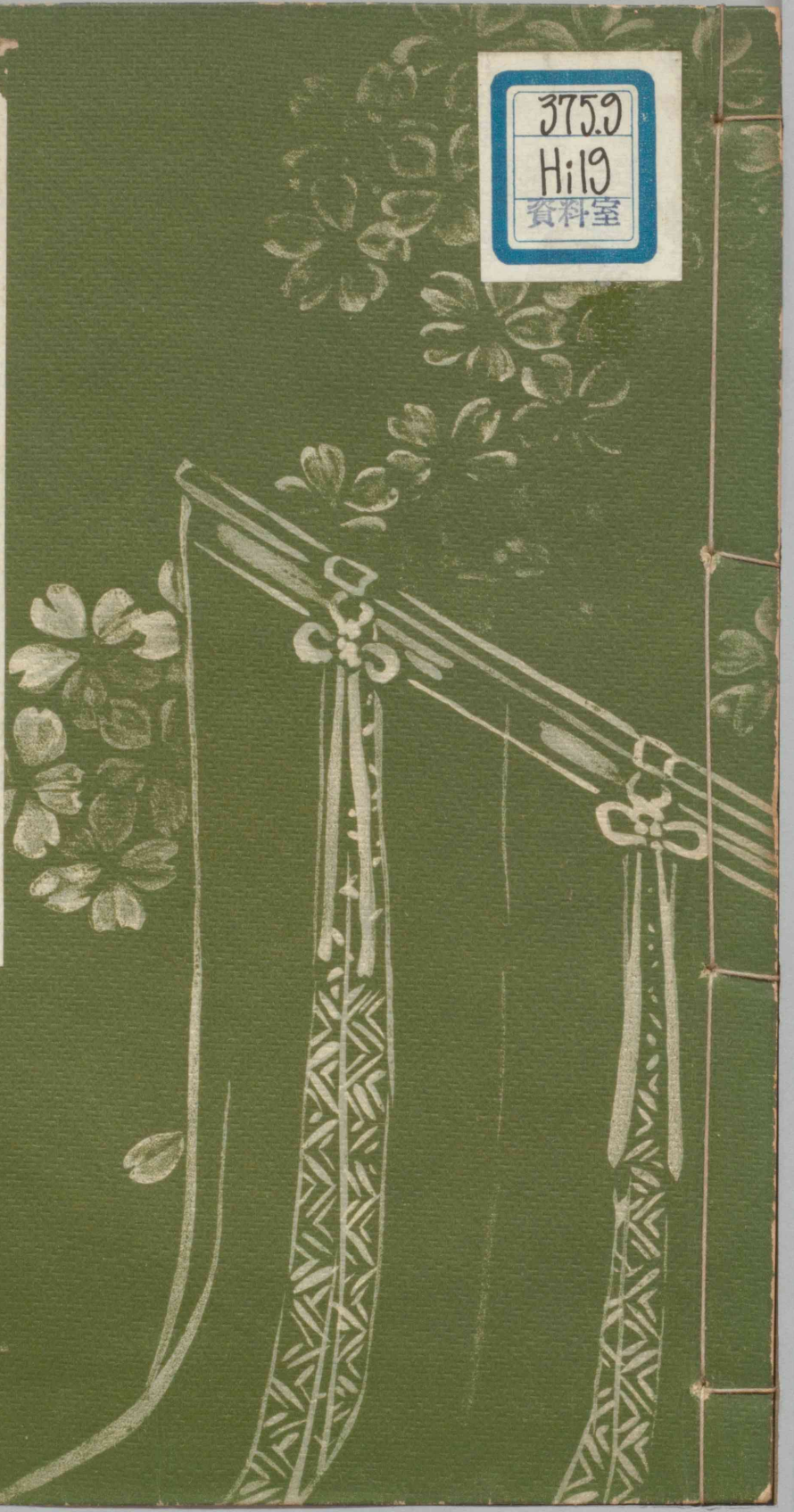
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Hi19
資料室

女子新讀本 卷八



395.9
H119

文部省檢定濟

大正十五年十月二十一日 高等女學校國語科教科書

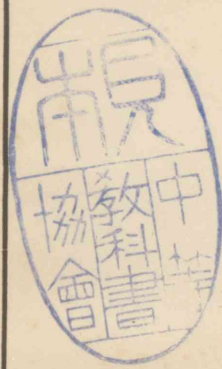
東京帝國大學助教授文學士久松潜一編



新讀本



東京 至文堂



女子新讀本 卷八

目次

一	山の温泉から	吉田絃二郎	一
二	秋窓雜記	北村透谷	七
三	嗟峨と宇治	笹川臨風	二
四	古今新古今(和歌)		二四
五	親として	與謝野晶子	三〇
六	曉の誕生(韻文)	島崎藤村	三三
七	だるま劇	武者小路實篤	四〇

目次

一

八 佛像彫刻……………瀧 精 一…一九

九 光の國……………吉江孤雁…七〇

一〇 石を切り出す山(韻文)……………百田宗治…七

二 靈 數……………松 浦 一…八

三 尾形了齋覺え書……………芥川龍之介…六

三 愛兒の死の前に……………西田幾多郎…九

四 靈より肉へ、肉より靈へ……………厨川白村…二三

五 我が帝國の二大問題……………徳富蘇峯…二四

六 徒然草より……………吉田兼好…三〇

(一) 石清水……………一三〇

(二) 和漢朗詠集……………一三一

(三) もろ矢……………一三一

(四) 高名の木のぼり……………一三三

(五) 佛問答……………一三四

七 俊 寛(一)……………菊 池 寛…三五

八 俊 寛(二)……………菊 池 寛…三四

九 人麿と赤人の歌……………島 木 赤 彦…三五



女子新讀本 卷八

文學士 久松潜一 編

一 山の温泉から

四五日前から再び山の温泉に來ました。今年はやつと夏が過ぎかけたばかりなのに、いつもの神経痛がおこつて來ましたので、毎日湯に浸つてゐます。

山にはすでに秋の色が漂うてをります。一枚一枚木の葉が光つてをります。朝と夕暮には、屹度雨が湯の町を洗

一 山の温泉から

一

目

次
終

つて山を越えて行きます。

この町では今夜が明月だとか言つて、芒の穂などを川の縁から手折つて來てをります。

山の月はまた驚くほど澄んでゐます。白い雲が山から出ては、山に隠れて行くのを見てゐると、子供のころのことなど思ひ出します。

私は月を見がてらS寺の山門をくぐつて行きました。

丁度夜のお勤めがはじまつてゐるところでした。八九人の坊さんたちが、須彌壇の前を輪を作つて廻りながら讀經をしてゐます。水のやうな月の光が高い窓から、御堂の中に流れこんでゐました。そこには、暗い柱の蔭に一人の

雛僧が合掌して立つてゐました。小さな猫が雛僧の足もとで背のびをして、須彌壇の後の方へ、のそくと歩いて行つたのを面白いと思つて見てゐました。

坊さんたちは幾度か全身を投げ出すやうに、跪いては祈り、祈つては讀經しました。

一本の蠟燭の前に幾人もの坊さんたちが、毎夜このやうなお勤めをすることを考へると、何だか嚴肅な心持にならずにはをれませんでした。

何故あの人たちはお勤めをしなければならぬのか。世間の人たちは申します、佛教は腐敗してゐる、ただ佛教の形骸だけが残つてゐると。そんなことも言へるかも知れ

ません。けれども、私はこの山の中の古刹で薄暗い蠟燭の前にお勤めをしてゐる人たちを見た時、どうしてもそんなことを言明する氣にはなれませんでした。たしかにあの形骸の底には、何か潜んでゐるにちがひない。

十二三人の湯治客らしい男女が、縁に近く跪いてゐるのを見た時も、私は同じことを思ひました。

人間は何かを永遠に求めてゐるのだ。人間は悠久永遠を想ふことなしには生きてをれないのだ。人間は自分で何かを求めつゝも、實際は何を求めてゐるのか、恐らく永久に知ることとは出来ないであらう。けれども、求めずには生きてをられないのだ。

經を讀んでゐる人も、頭を垂れてゐる人も、何かを求めようとすする心、何かのかに頼らないではをられないといつたやうな、ただそれだけの純な、しかし本然的な魂の衝動にうごかされて、蠟燭の前に坐つてゐるのではないか。人類が生れて幾十年來、すべての人類が何を求むるかを知らず、ただ祈りただ經を讀み跪いて來たのではなかつたか。八九人の御堂の僧侶たちの黒衣を見てゐる間に、私の耳には人類全體の悲しい聲が聽えて來るやうでした。誰でも忘れてはならないのだ。誰も永遠を想ふことを忘れてはならないのだ。私はこんなことを考へながら、山門をくぐつて河の岸へ

出ました。

高い山と山の間には、挟まれた湯の町の燈が消えかゝつて
ゐました。私はこのやうな山の中にも、夜毎永遠を想ふ人
間の祈りがあり、跪きがあることを思ふと、非常に人生とい
ふものが、寂しくはあるが、嚴肅なものであるといふ氣にな
らずにはをれませんでした。人間が住むところには、必ず
そこには永遠を欲する、或は悠久にあこがるゝ宗教的な欣
求心が生きてゐることを考へると、どうしても人生に對し
ていゝ加減な心ではすまされなくなるやうな氣がして來
るのでした。

私は夜が更けてから宿に歸つて來ました。

「私が生きてゐる間は、祈りの心を失つてはならない。私は
自分の心にかう命じました。

悠久を思ふ心を生みつけられたことを感謝せずにはを
られませんか。私は何もせず、何も知らないで死んでしまふ
かも知れない。それでも私は生まれて來たことを後悔は
しない。何だかわからないが、悠久を思ふ心を人間にあた
へられた神に感謝せずにはをられません。
私はこんな殊勝な心になつたのでした。私は近ごろに
なく愉快でした。

*
名は源次郎
早稻田大學講師

*
(吉田絃二郎)

二 秋窓雜記

(一)
かなしきものは秋なれど、また心地好きものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜けれど、秋の土を高うするに如かず。花の人を酔はしむると、月の人を清ましむるとは、自ら味はひを異にするものあり。喜樂の中に人間の五情を没了するは世俗の免るる能はざるところながら、われは萬木凋落の期に當り靜かに物象を察するの快なるを選ぶなり。

(二)

希望は人を欺き易きものぞ。今年の盛夏鎌倉に遊びて、居ること僅かに二日、思へらく此の秋こそは爰に來りてよ

るづの秋の悲しきを味はひ得んと。圖らざりき、身事匆忙として、空しく中秋の好時節を紅塵萬丈の裡に過さんとは。然れども、秋は鎌倉に限るにあらず、人間到るところに詩界の秋あり。欺き易き希望を駕御する道は斯にこそあれ。

(三)

我が庵も亦秋の光景には洩れざりけり。咽なきやぶるばかりのひよどりの聲々高き梢に聞ゆるに、窓開きてそこかこゝかとうち見れば、そこにもあらず、こゝにもあらず、窓を閉ぢて書を披けば一層高く聞ゆめり。鳥の聲ぞと聞けば、鳥の聲なり、秋の聲ぞと聞けば、おもしろさ讀書の類にあらず。

(四)

夜更けて枕の未だ安まらぬ時、蟋蟀の聲を聞くは眞の秋の情なりけり。その聲を聞く時に、希望もなく失望もなく、恐怖もなく欣樂もなし。世の心全く失せて、秋のみ胸に充つるなり。松蟲・鈴蟲のみ秋を語るにあらず、古書古文のみ物の理を我に教ふるにあらず、一蟋蟀の爲に我は眠を惜しまれて、物思ひなき心に思を宿しけり。

(五)

芭蕉の葉色秋風を笑ひて、籬を蓋へる微かなる住家より、ゆかしき音の洩れきこゆるに、仇心浮きて其が中を覗ひ見れば、年老いたる盲女の琵琶を弾ずる面影、凜乎として俗世

*名は門太郎
文學者
明治二十七年歿

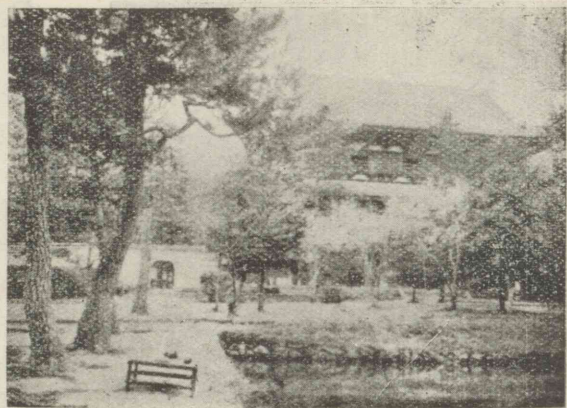
の物ならず。その律調の端正なること、今の世の浮華なる音楽に較ぶべからず、うれしき事に思ひぬ。
* (北村透谷)

三 嵯峨と宇治

京都で一番好きどころは嵯峨である。宇治も好い處ではあるが、嵯峨の多趣多様には及ばない。同じ二音の上は清音、下は濁音ではあるが、うぢよりは、さがの方が耳に響きが好い。宇治と言ふと、茶を聯想するが、嵯峨と言ふと、歴史を聯想し、傳説を聯想し、淋しさゆかしさを聯想する。宇治にも歴史がないではない、傳説がないではない、淋しさゆかしさがないではない。しかし、宇治の歴史は合戦の歴史

である、橋姫の傳説である。關白頼通の榮華の跡、源三位頼政の悲壯の最期と言ふやうな淋しさもあるが、嵯峨には女性的の悲しさ淋しさが横溢してゐる。鳳凰堂の輪奐はなくとも、天龍寺の伽藍がある。藤原期の美は宇治に其の面影を残してゐるが、嵯峨には室町時代の滋味が傳はつてゐる。けれど、嵯峨と言ふと室町よりは平家に縁が深い。平家物語と嵯峨との間には、切つても切れぬ縁故がある。往生院から二尊院へ辿ると、平家趣味を覺えざるを得ない。今の小督の墓所は疑はしいとしても、嵯峨野の露は曾て仲國が踏んだ其の跡に零ちてゐる。横笛は曾ては其の草を踏み分けて、瀧口入道の庵室を音づれたてはないか。嵯峨

野はすべて平語の爲に色彩を點じてゐる。



寺 福 萬 山 樂 黄

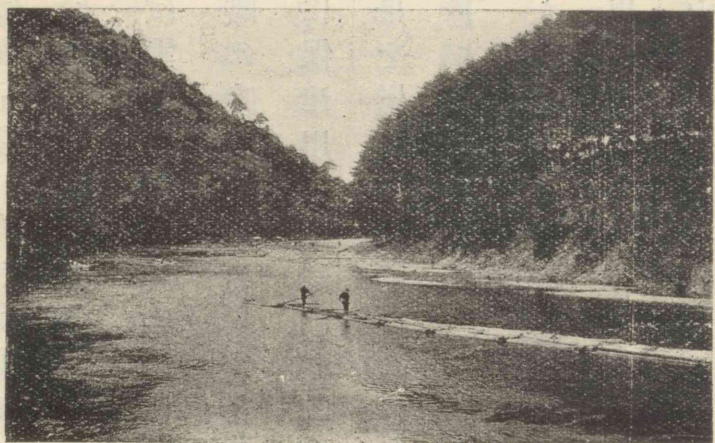
宇治は秋よりも春の地である。堤の上に咲き揃つた花の間から、箭と駛る急流を眺めるも、心ゆくわざではあるが、朧月夜に平等院の下を徘徊すると、しつとりとした氣分が搖曳する。更に好いのは、晩春から初夏の頃である。茶の緑芽が延びて、茶摘唄がをちこちに聞える。赤い襟、白い手拭姿が到る處にちら〜する。六地藏・木幡から、茶畑を出つ入りつしながら、黄檗山萬

福寺の幽寂な境に遊ぶと、悠揚として、氣も心も暢びくす
 る。日野醍醐の山々は眠るやうで、一陣の青嵐は喜撰ヶ嶽
 朝日山からさつと吹いて、青葉若葉
 をふるはせる。宇治橋の上に佇ん
 で、早瀬を下る柴舟の行方を眺めて
 ゐると、我が神も遠く馳せる思がす
 る。「山のかたは霞隔てて、寒き洲崎
 に立てる鵲の姿も、所からはいと可
 笑う見ゆるに、宇治橋の遙々と見渡
 さるるに、柴舟の所々に行違ひたる
 など、外には目馴れぬことどものみ、取り集めたる所なれば、



宇治川

見紛ふたび毎に、猶其の昔のことの唯今の心ちして、いとか
 からぬ人を見かはしたらんに
 てだに、珍しきなかの哀多く添
 ひ給ふべき程なり「浮舟の巻」と
 源氏物語にあるは、春まだ淺き
 二月の宇治の光景である。
 嵯峨は四季折々によい所で
 ある。茶の宇治は端唄に知ら
 れてゐるが、春の嵯峨は常磐津
 で名高い。如何にも衣笠山・双
 ケ岡が霞に隔てられて、御室に



風 峽

は稚兒櫻が笑ひ、嵐山には翠の裡に一抹の紅雲がたなびくところなど、又なく長閑である。大澤の池のほとりに、落花は雪と紛ひ、清瀧の流に若鮎が香を趁うて唸囁するのは、嵯峨の晩春である。青葉・若葉は風にそよいで、見る日も鮮かに、保津川の兩岸に躑躅花が燃え出づるは、夏の景物である。舟を嵐峽に放つて、急湍に河鹿の啼く音を聞けば、涼風が腋下より起る。ほととぎす、千鳥あたりで、曉の空に啼く杜鵑を聞くも一興であらう。けれども嵯峨の特色は秋にある。嵐の山の秋の暮と古人は詠んでゐるではないか。小倉の山は色濃き峯のもみぢ葉に依りて、今一たびの御幸を仰がんと願つてゐたではないか。嵯峨野は男鹿鳴くところを詠

ぜられてゐるではないか。「龜山近きあたりに、松の一村ありける方、秋霧の絶間より爪音やさしき琴の音幽かにきこえたるは、いかに嵯峨野にふさはしい。去來は、ころ〜と夜もすがら、屋根の上からちる柿の音を聞いて、つくづく晩秋の淋しさを感じたのである。雪の嵐峽の風趣を思はぬでもないが、月夜の嵯峨野は、一度夜もすがら徘徊したいと思つてゐる。

宇治川の流は男性的である。琵琶湖十萬頃の水は一棧の路を辿つて、勢田の長橋の下を潜り、石山の麓を洗ひ、洗堰を過ぎて、鹿飛米かしに至りて、瀬に白沫を飛ばし、水に藍を溶かし、一瀉千里、平等院の前を過ぎて、伏見へと奔る。豪宕

の趣があつて、絶えて纖麗の態はない。保津川の流も嵐峽に入ると、清淺にして、優にやさしい。四條派畫家の好畫題となるは當然である。美しい感じはあつても、勇ましい風情はない。宇治の水は以て酔ひ醒めの料に供すべく、嵐峽の水は茗を煮るべきであらう。宇治橋三の間の水はよし清白にして、軽いと言はれても、趣から言ふと、煮茗は嵐峽の水が適するやうに思はれる。

宇治は嵯峨の廣きに及ばぬ。名所も嵯峨の多きに比ぶべくもない。宇治橋あり、石塔婆あり、橘小島崎あり、離宮八幡あり、興聖寺あり、橘姫社、縣社があつても、行人の感興を惹起することは少い。獨り平等院と萬福寺とがあつて、宇治

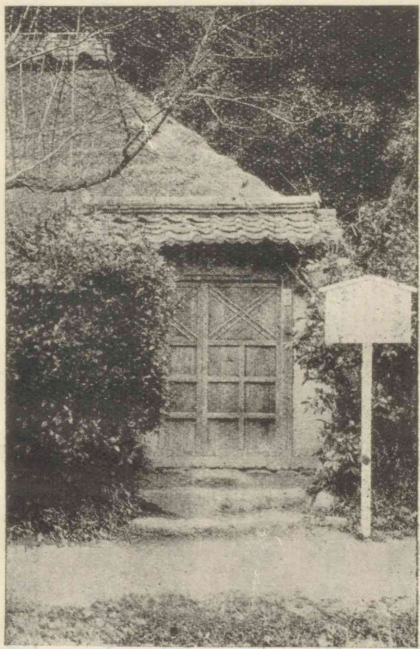
の爲に光彩を放つてゐる。嵯峨野と言ふは、一體どの邊を指したものであらう。野の宮の南北と言ふ説は餘りに限られた説で、拘泥し過ぎてゐる。袖中抄には、嵯峨野は葛野とて紫野につづけるなりとあるが、これは又廣過ぎはしまいか。必ずしも或一部に限局せず、此の附近の一帶を指して呼ぶ方が、寧ろ適當であらう。三代實錄元慶六年十二月二十一日の條に、山城の國葛野郡嵯峨野はもと既に制あらず、今新に禁を加ふ、樵夫牧豎の外、鷹を放ち兔を追ふ勿れとあるのを見ると、嵯峨野の境界もあつたらしく、又相當に廣かつたらしい。俊成卿の歌に、秋はまづ都の西と尋ぬれば、嵯峨野の花ぞ咲きはじめけると詠じ、兼宗の詠に、きぎす

鳴く嵯峨野の原の御幸には、古き跡をや先づたづぬらん。とよみ、西行が「此の里や嵯峨の御狩の跡ならん、野山も里もあせかはりけり」と吟じたるに依りても、嵯峨野の廣きを偲ばせ、又其の地の一小部分に限られたものでないことを思はせる。双ヶ岡から西山際まではおしなべて嵯峨野と汎稱してもよからう。廣澤の池、大澤の池から、太秦近くまでも嵯峨野の一部と見て差支はあるまい。よしや斯う廣く見ないでも、嵐山の對岸から天龍寺・二尊院・往生院野の宮・清涼寺を籠めて、上嵯峨・下嵯峨一帯を嵯峨野と見て、其の間に散在する名所・舊蹟は少くない。行平の詠に「嵯峨の山御幸絶えにし芹川の、千代の古道」とはありけり」とある。此の千

代の古道に就いては異説があつて、必ずしも其處を指定したのではなく、久しき行幸の例を言ふのであると言ふやうに説かれてはゐるが、後世では、廣澤の池の東三町許のところをしか呼んでゐる。して見ると、御室の仁和寺にもう近い處であるから、之に依れば、此のあたりも嵯峨の山と言ふことになる。暫く解釋はいづれにしても、嵯峨は宇治よりも廣い。黄檗あたりまでを宇治に屬する名所としても、宇治は其の廣狹に於て、名所・舊蹟の多寡に於て、遠く嵯峨に及ぶべくもない。

宇治は次第に俗化して來た。河上に火藥製造所が出來たり、平等院前に遊園が設けられんとしてたりして、往時の舊

觀が滅殺された。嵯峨とても開けないではない。嵐峽にボートが浮かんだり、温泉前に赤煉瓦の隧道が醜體を露出したたりなどして、甚だ殺風景とはなつたが、工場の烟は飛散



今の落柿舎

せず、俗悪なるペンキ塗などは見えず、鴨川の沿岸が醜化したるに比ぶべくもない。俗化する京洛の地に於て此處のみは、閑寂の趣が深い。落柿舎の舊蹟から、遙に嵐山に對すると、隱棲して見たいやうな心地がする。唯近來嵯峨の名物であつ

た竹藪が漸次減少するやの觀がある。野の宮あたりに轟轟たる竹林を見ると、嵯峨野の深みと幽邃とを偲ばせる。嵯峨の爲には竹林の保存も講究せねばならぬ。

嵐山電車とはあるが、京の人は嵐山と言はずに、すぐ嵯峨と言ふ。けれど嵯峨と言つて、電車切符を買つたら嵯峨の停留場と間違へられるであらう。併し通例、嵯峨へお行きやすかと京の人は言ふが、此の場合嵯峨とは嵐山を意味する。嵐山と言はんよりは、嵯峨と言ふ方が、古風で、なつかしみが深い。

以前は宇治に遊び、一日ゆつくりして、日暮前に柴舟に投じて、觀月橋まで下り、月を踏んで京都へ歸つたことが屢あ

つた。ところが近頃宇治へ行くと、氣忙しくなつて勿々に歸つてしまふ。之に反して、嵯峨野のそぞろあるきには時の經つのを忘れる。予は近來京洛に赴く毎に、必ず一度は嵯峨に遊んで、嵐峽の風光を探るを常とする。それでもつて宇治へは三度に一度しか尋ねない。そこに予が宇治と嵯峨とに對する觀賞の相違がある。しかし要するに、是は予のみの好みであつて、敢へて人に強ふる所ではない。

（笹川臨風）

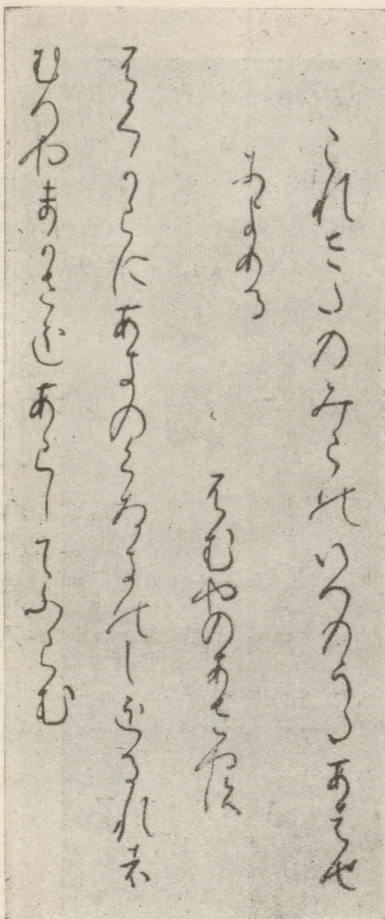
*名は種郎
文學博士
國史學者

四 古今新古今

歌奉れと仰せられし時詠みて奉れる 紀貫之

さくら花咲きにけらしな、あしびきの

山の峽より見ゆる白雲。



笹之目紀傳

歸雁を詠める

伊勢

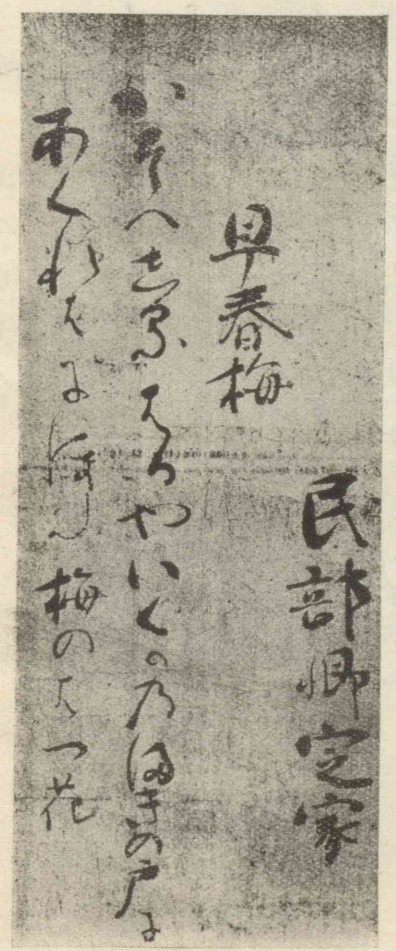
春霞立つを見すてて行く雁は

花なき里にすみやならへる。

これきたのみこの
のいへのうたあ
はせによめる
ふむやのあさや
す
ふくからにあきの
くさきのしをるれ
はむへやまかせを
あらしてふらむ

家に藤の花咲けりけるを人の立ちとまりて見けるを
詠める
凡河内躬恒

わが宿にさける藤波たちかへり
過ぎがてにのみ人の見るらむ。



民部卿定家
早春梅
かそへしるはるや
いくののまきの戸
にあくれはにはほふ
梅のはつ花

是貞の皇子の歌合の歌
壬生忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ、

鹿のなく音に目をさましつゝ。

詩を作らせて歌に合せ侍りしに
藤原秀能

夕月夜しほ満ちくらし、難波江の

葦の若葉をこゆる白浪。

攝政太政大臣家百首歌合に春曙といふ心を詠み侍り
ける
藤原家隆

霞立つ末の松山ほのぼのと

波にはなる、横雲の空。

守覺法親王五十首歌詠ませ侍りけるに藤原定家

春の夜の夢の浮橋とだえして

峯にわかる、横雲の空。

五十首歌奉りし時

寂蓮法師

むら雨の露もまだひぬ槇の葉に

霧立ちのぼる秋の夕暮

宮木野

顯俊

かかれわたる草のけしきにみやきの
花のさかりをおもひやるかな

筆行四傳

西行法師すゝめける百首歌に

藤原定家

見渡せば花も紅葉もなかりけり

浦の苫屋の秋の夕暮

和歌所歌合に關路秋風といふことを

藤原良經

人すまぬ不破の關屋の板廂

あれにし後はただ秋の風

あつまのかたよ
り京にかへりけ
るときみちにて
よめる
壬生のよしな
りかむすめ
やまかくすはるの
かすみそうらめし
きいつれみやこの
さかひなるらん

筆頼俊源

題知らず

西行法師

古畑のそばの立木にゐる鳩の

友よぶ聲のすぎき夕暮

山家暮春といへる心を

宮内卿

柴の戸をさすや入日のなごりなく

春暮れかゝる山の端の雲。

深山落葉といへる心を

源俊賴

日くるればあふ人もなしまさきちる

峯のあらしの音ばかりして。

五 親として

私は小さい自分の子供に對しては母として感じることも多く、中學卒業以上の自分の子供には友達のやうな氣分になつて話してゐる場合が多いのです。

新しい生活、新しい時代といふやうな事に就いては、とても子供達に及ばない所が多いと思ひます。親が理性で取り入れるものを、子供達は温い全靈全身の實感で受け取ります。その最も顯著な實例は、音樂に今の子供達の敏感なことも、證明されると思ひます。

親は氣分に於ても、動もすれば舊くなるもの、鈍感になるものと言ふことに就いて反省しないと、子供達と同じ世界に住まれないことになります。新舊思想の衝突と云ふやうな事も、之に由來するのです。親子の間ばかりで無く、先輩と後進との間に協調しがたい齟齬を生じるのも、先輩が新しい時代の氣分や感情に鈍感になるからです。

子供の思つてゐることが、悉く思慮の足りないものであると臆断してはなりません。未來を嗅ぎ知つてゐることは子供の方が敏活です。それに親が歩調を合せることは困難ですが、せめてそれに同情を持ち、子供には別に新しい子供の世界を完成させることに親の力を用ひ、子供が過たないやうに指導し、助成し、参考人となる心掛が大切だと思います。教師の教育に盡くして下さる精神も、是に外ならないものだと思へてゐます。

親なり老人なりから見ると、子供は未知數であるだけに敬すべく恐るべき者だと思ひます。若し子供に敬意と恐ろしさを感じず、自分よりも低級未熟な者だと言ふ風に

考へてゐる親や老人があつたら、もう餘程時代に遅れてゐる親や老人であると言ふことを反省して各自に警戒すべきです。

親や老人の實力は、大抵底が見えてゐる筈です。子供は反對にこれから新しい人生を作る精銳です。その指導を少しでも間違へれば危険なことです。未來の人間の指導者となるものは重大な責任を負つてゐるのです。

私は自分の子に對して出過ぎないやうにしてゐます、干渉と取られる風なことを慎んで避けてゐます。唯大やうな世話役と外面には見えながら、内實は愛の行きわたつた、注意深い親でありたいと思へてゐます。

私はまた、自分の子供の缺點や過失をも、人間に有りがちなものとして豫め勘定のなかに入れて置きます。自分が既に缺點と過失の多い人間であるに關らず、自分の子供や他人に對してのみ全く潔癖な考へ方をすると言ふのは、私の爲し得ない事です。努力して缺點を少くさせ過失を避けさせるのは、親が子に對して注意すべき事です。缺點と過失の絶無を強ひるやうな不自然な態度は持ちたくありません。若し我が子が何か過失をしたら、早くそれを改めさせて、もつと善い事に力を用ひさせ、禍を福に轉換させるやうに助成したいものです。

子供に取つて、親は常に物の言ひよい、障壁の無い相談役になつてやらねばなりません。親と子の間で明るく許し合ふことの出来ないのは、大抵親の方が時代の思想感情に落伍して不通偏狭の人間になつてゐるからです。この意味で親自身の上に一生涯怠つてならないものは、新人としての教育です。親が斷えず新人である努力をつづけてゐる家庭は幸福です。教育界にしても、校長・教師の人達が常に率先して新しい自分の教育に自ら勵んでゐる學校は、その教育が必ず生きてゐます。

親は何よりも自らの實行を以てそれと無く我が子を導くべきです。是こそ好い日光と慈雨との中に植物を置くやうなものです。我が子を口で言つて教へることは、第二

位に置くやうにしたいと思ひます。たとへば、自ら書物を讀まずして、子供に書物を讀めと言ふのは、親として愧づべきことです。親が善い友達に交らないでゐて、子供に益友を擇べとは言ひかねます。また親が正しい職業に従事せず、不淨な収入で暮らしたり、金利に由りて遊んで暮らしたりして居ながら、子供に正直と勤勞の生活を送れとは言ひ難いことだと思ひます。

親のみが子供を教へるものだと考へたら間違です。子供は大抵純粹であり、勉強家であり、新しい時代の豫見者であつて、それがどれくらゐ親達を教へ淨め、激勵してくれるか知れません。私はこの意味で常に自分の子供達に感謝

して居ます。

(興謝野晶子)

*歌人
社會評論家

六 曉の誕生

東の空のほのぼのと、

汝が生は白みそめにけり。

この曉のさまを見て、

運命をいかに占なはん。

ことにさやけき紅の

光を放つ明星や、

やがて處女となるまでの

汝がおひさきのしるべせよ。

朝風舞をまふごとく

はるかに雲の袖を吹き、

鶏は寢覺に驚きて

先づ黎明を呼びにけり。

はじめて朝の床の上に

汝が初聲を聞くときは、

蕾を破るあけほのの

蓮の花にまがふかな。

ぬるき潮に浴みして、

朝日に匂ふ茜染

まだ罪もなき姿こそ、

なかばは夢の風情なれ。

いかにいかなる世なりとは、

思ふ心もなからまし。

そのうるはしき眼もて、

何を見んとか願ふらん。

まだ生れ來し世の中に、
願ふもとめもなからまし。
空にやさしき手をのべて
何をか早も慕ふらん。

行末花と生ひ立ちて、
いかなる夢を重ぬとも、
かゝるゆたけき朝のごと
心の空の靜かなれ。

あゝ朽ちずてふ九つの

藝術の神も心あらば、
このうるはしきみどりごに
香の露をそゝげかし。

やがて好みて琴弾かば
指を葡萄の蔓となし、
耳をそよげる葦となし、
たなれの絲に觸れしめよ。

やがて好みて筆持たば、
心を文の箴となし、

胸を流るゝ雅みやびとなし、
色あたらしく織らしめよ。

よし琴弾かず、歌よまず、
晝をかくわざにおとるとも、

せめて藝術を戀ひ慕ふ
深き情を持たしめよ。

盃あげてよき酒を

心々にくみかはし、

歌を作りてよろこびの

この曉をいはひうたはん。

(島崎藤村)

七 だるま

登場人物

だるま

A

B

僧侶

(だるまの修業して居る小さい堂の前)

(A B 登場)

A この堂に住んでゐる男を君は知つてゐるか。

B 知らない。

A さうか。この堂の内には珍しい男が住んでゐるのだ。

B どんな男だい。

A 八九年の間、壁許り見てゐると云ふ男が住んでゐるのだ。

B 壁を八九年見てゐる、何の爲だい。

A 何の爲だかわかれば、珍しい男ぢやないことになるが、誰も何の爲に壁とにらめつこしてゐるかを知つてゐるものはないのだ。皆の言ふ處だと白痴だらうと云ふことになつてゐる。

B そんな大きな聲でいふと、内へ聞えやしないか。

A 大夫丈、白痴でその上、つんぽと來てゐるのだからね。

B つんぽなのかい。

A つんぽなのさ。

B それで壁ばかり見てゐるのか。

A さうだ、壁ばかり見てゐる。

B どうして食つてゐるのだい。

A 近處の人間が、飯だけはかゝさず持つて來て入れてやつてゐるらしい。

B それは感心だね。

B それは時々、飯を運ぶのを忘れる時もあるだらう。三日や四日運ぶのをわざと忘れて見た時があつたが、平氣でやはり壁を見てゐたさうだよ。

B づうく、しい奴だね。

A だが、白痴としたら出來のいゝ、白痴で、わるいことは何もしないのだ。そしてただ壁だけ見てゐるのだから、始末はいゝのだ。飢死されるとこまるので、飯は食はしてゐるが、それもごく少し

きり食はないのだから、別に困ることはないのだ。

B だが、飯をやらなかつたら、何處かへゆくだらう。

A 處がそんなことが考へられる男ではないやうだ。飯を入れてやらなければ、出て食ふなんて云ふ考は起らないらしい。

B 珍しい馬鹿だね。

A その癡顔だけは中々怖い顔をしてゐる、賢さうな顔をしてゐる。

こんな話がある、何年前かに戦争があつて、敵の兵隊がこゝをあらしたことがあつた時、この内にゐるやつこそさんだけは、逃げないでやはりこゝで壁を見てゐたさうだ。皆が逃げろと言つたつて、つんぼだらう、だから平氣であるので、皆も死ぬなら勝手に死ぬがいゝと思つて逃げたのださうだが、やつこさんはそんなことは一向平氣で、相變らず顔を壁に向けて坐つてゐたら、敵兵

が入つて来て、首を切らうとしたさうだが、やつこさんは平氣でゐたさうだ。あんまり平氣なので、兵隊の方が怖くなつて、是は餘程偉い人にちがひない、聖者にちがひないと思つて、お時儀して逃げたさうだ。誰だつて顔を見ると、白痴だとは思はないからね。

B どんな顔してゐるのだい。

A 見たければ見せてやらう。(戸をあけようとする)

B 黙つて戸をあけてもいゝのかい。

A いゝとも、聲かけたつて聞えやしないからね。時々人が來ると僕はこゝをあけて見せてやるが、自分の首が落ちかけたつて平氣な男だから、戸位あけたつて、おどろきはしないよ。(戸をあけようとする) 中々かたい戸だよ。(あける) どうだ中々偉さうな顔し

てゐるだらう。白痴とは思へないだらう。

B 思へないね。中々するどい顔してゐるね。一寸見ると白痴といふより氣違ひに見えるね。

A だが、氣違ひとしてはおとなしすぎるのだから、やはり白痴なのだらう。

B さうかね、見かけは中々堂々としてゐるね。白痴とはどう見ても見えないね。

A 人は見かけによらないと云ふが、本當だね。僕は初こいつはきつと利口な人間なのだが、心願のために無言の行をしてゐるのだと思つて、内々尊敬してゐたが、あんまり鈍いのでがっかりしてしまつたよ。この前僕がこゝを通つた時、一人の男があいつの頭をなぐつて、いゝ音がするだらうと言つてゐたがね。僕は

あいつが起き上るか、どうかするだらうと思つてゐたが、少しも表情がかはらなかつた。つまり何も感じなくなつてゐるのだね。

B しかし人間も、其處まで馬鹿になれ、ばい、ね。

A 本當だよ。僕もその點では、こいつに感心してゐるのだよ。何だつて怖いものはないのだ。飢死をすることも、殺されることも、平氣なのだからね。なぐられたつて悪口されたつて、蚊がとまつた程にも思はない。そのかはり、楽しみなんか何も感じないだらう。何のことはない金でつくつた彫刻のやうなものだね。もう生きながら死んでゐるやうなものだね。ただ息がかよつてゐると云ふだけに過ぎないね。人間もかうなつてはおしまひだよ。だが、そのかはり心配もないだらう、苦勞なんか

もないだらう。この位暢氣な人間はないだらう。

B しかし、本當にあれで馬鹿なのかね、僕にはさうは思へないね。

A しかし、利口な人間が、今時に、こんなことを八九年もつづけることは出来まい。だつて、壁を見てゐたつて何になるだらう。何にもなるわけではないぢやないか。

B それはさうだね。しかし、頭をたゞかれても本當に顔色をかへないかね、ただかへないふりをしてゐるだけぢやないかね。

A いや、たしかにかへないね。僕はよく見てゐた。

B しかし、遠くで見てゐたのだらう。それぢや、目玉の動きなんかよくわかるわけではない。

A それなら、僕が一つ頭をたゞいて見るからよく見て居給へ。

B たゞいても大丈夫かい。この男にいきなり、ど鳴られたら腰を

ぬかしさうだよ。何しろこんな怖い顔は滅多に見たことはないからね。

A 大丈夫だよ。いゝかい、なぐるからよく見て居給へ。

B 大丈夫かい、本當に。

A 大丈夫とも。よく見てゐたまへ。

B よく見れば見る程、珍しい顔だね。どうもこいつが怒り出したら、しめ殺されて喰はれさうだね。

A いや、こいつは實に溫和しい奴なのだ。怖いのは顔だけだよ。それならなぐるよ。

B よし。

(A 頭をなぐる)

A どうだ。

B 不思議だね、どうも不思議だ。もう一度なぐつて見てくれないか。(そばによる)

A よし。(又なぐる) どうだ、やはりかはらないだらう。

B かはらない。不思議だね。生きてゐるのかね。

A 生きてゐるにはきまつてゐるよ。

B どうもやはり君の言ふ通り、この男は白痴だね。神経がないのだね。僕はこんな男を見たことはない。土産話に一つ僕にも打たしてもらはうかね。

A あゝ、かまはないから遠慮なく打ちたまへ。

B まるで君のもののやうだね、はつはつは。

A はつはつは。

B 一つそれではなぐらしてもらはうかね。

A 遠慮なく。

B それでは今度君が見てゐてくれ給へ。

A よし。

B なぐるからね。(なぐる) どうだ。

A なんともない。

B 本當にこの頭はなぐるといゝ音がするね。もう一つなぐつて見てもいゝかね。

A いゝとも。

B お許しが出たからなぐるかな。だが、氣の毒だね。

A 感じないのだからかまはないよ。

B 一つうんと力入れてなぐつても大丈夫かね。

A 君の力位なら大丈夫だらう。

B 不意に感じて、飛び上られてはびつくりするね。

A 大丈夫だよ。この前なぐつた奴は、君より力が強さうな男だったよ。

B それなら、これが最後だから、話のたねに力一杯なぐつてやらう。

(力をこめてなぐる)

だるま(同時に)喝。

(二人腰をぬかすやうにおどろき)

A 赦して下さい。

B 赦して下さい。

(だるま、黙つて立つて便所にゆく)

A なんだ小便に行つたのだ。びつくりしたな。あの聲にはおどろいたな。何て云ふ聲だらう。

B 本當にびつくりした。逃げ出さうか。

A あんまりびつくりしたので腰が立たなくなつてしまつた。

B 俺の腰も言ふことを聞かなくなつた。だからよせばよかつたのだ。君があんなことを言ふので、ひどい目にあつた。どうなるだらう。

A ともかく逃げられるだけ逃げよう。(いざりながら逃げようとする)

(だるま歸つて来て、又以前の處に坐る)

A こいつは逃げないでも大丈夫だよ。やつこさんびつくりして聲は出したものの、其處が馬鹿本性でなぐられたことは氣がつかず、俺達のあることは知らないのだ。不意に小便に行きたくなつただけなのだ。君があんまりひどくたゝいたので、ひよつと氣がついたら、小便に行きたくなつたのだらう。何でもなか

つたのだ。

B 随分驚かされたな、あの聲には、一時はどうなるかと思つた。

A もう一度なぐる元氣があるかね。

B もうとてもない。腰は立つかね。

A やつと立ちさうだ。随分驚いたね。壽命が三年もちぢこまつたやうだ。

B どうもいくぢのない話だね。

A い、話の種が出来てうれしいだらう。

B しかし腰をぬかした話は内證にしておかう。

A あんまり名譽なことでもないからね。

B 君はもつと度胸があるのかと思つたよ。

A しかし、僕にはもう一遍位なぐれる元氣があるね。

B 本當かい。

A 本當とも。だが、君が驚くと可愛さうだからやめておかう。

B なに、僕はあの戸口で見てゐるから、なぐれるなら一つなぐつて見せてもらはう。だが、なぐる勇氣は君にはないだらう。さつき

のやうぢや、とてもそんな勇氣が君にあると思へない。

A なくつてどうする。一つ俺の勇氣を見せてやらう。(こはごはだるまに近づき手をふりあげる)

(だるまふり向く)

A (跪つき)お赦し下さい。お赦し下さい。

だるま 今日は何日かな。

(A B びつくりして口をもがもがする)

だるま お前さん方は、つんぼなのかい。

A いえ、いえ。

だるま 今日は何日かな。

A へい、へい、今日は十一月の十二日でございます。

だるま さうか、それでは今日でまる九年こゝにゐたわけだな。

A へい、へい。

だるま(立ち上り、鈍骨の俺も九年でやつと悟りの道を得られたわけ

だ。ありがたし、ありがたし。

(二人あつげに取られて見てゐる)

A あなたはつんぽではなかつたのですか。

だるま つんぽではない。

A さつきの失禮をどうぞお赦し下さい。

だるま お前さんは私に何もわるいことはしなかつたぢやないか。

A それでもあなたの頭をお打ちして。

だるま あ、お前さんだつたか。それはどうもありがたう。お前

さんに頭をぶたれたので、私は悟りに入れたのだ。佛さんが、お

前さんにのりうつつて私をぶつて下さつたのだ。

(若き立派な僧侶一人登場。だるまに最敬禮をする)

僧侶 佛さまよりのおつげでお迎へに参りました。

だるま さうか、それなら一緒に行かう。(二人に氣輕にお時儀し) さつ

きはどうもありがたう。

(僧侶とだるま退場二人あつげにとられる)

幕

*武者小路實篤

* 創作家
評論家

八 佛像彫刻

支那・日本の彫刻は、いづれも印度傳來の佛敎に伴なうて

開けたものであることは明白である。又印度の方ではギリシヤの影響が存外大きいのだから、延いて支那日本の彫刻が印度並びにギリシヤ的風致を傳へて居ることも、今日では殆ど動かすことの出来ぬ定説となつて居る。

元來支那本國では佛教渡來以前には、さのみ彫刻の發達して居た形跡は認められない。實に支那上古に於ける偶像彫刻は微々たるもので、僅かに金石類の工藝的な彫刻が行はれて居たに過ぎないやうである。これは一つには、その國の古代の風習が然らしめたのであらうと思はれる。特に支那では、その特殊な倫理主義に基づいて、懲惡の目的を以て惡人の像を作り、これを打つたり、毀つたりした。銅

器などの工藝品でも、饗饗たうたうを始めとして、さまざまな姦惡な者の像を彫刻する風が行はれた。ところが、一體美術としての彫刻には、惡人の像は不適當なのだから、かういふ物の盛んに行はれたといふことは、とりもなほさず、この國の藝術の發達することの出来なかつた所以なのである。

我が國では、佛教渡來以前にも、土偶類は随分盛んに製造せられたに相違ないが、これ等は専ら崇拜の對象として作られたものではなく、單に實在人の代用に供せられたに過ぎない。それで佛教の輸入せられてからの彫刻はどうかといふと、最初は印度ギリシヤ式そのままの物が多かつたのであるが、次第に自國の風に變化して來て、新機軸・新意匠

を出して、支那や朝鮮は勿論、其の本家たる印度以上に進歩したのである。



法隆寺金堂の釋迦三尊

我が國では、推古時代が始めて佛像彫刻の開けた時代で、この時代の作品はなほ素樸の域を脱して居ない。然る

に、天平時代に至つては異常な發展を來した。勿論當時の彫刻には支那唐代のその感化もあつたが、又大いに獨立

自由の發達が見られるのである。史家は或は天平時代を以て日本彫刻の黄金時代だと稱へて居る。いかにも今日遺つて居る當時の作品中、東大寺三月堂の梵天帝釋の如き、



藥師寺金堂の藥師三尊

藥師寺の藥師三尊の如き、東大寺戒壇院の四天王の如きは、日本藝術史を飾る至妙な作品と言はねばならぬ。藥師は面相が豊

満で、體格もよく整ひ、衣紋も流麗で、いかにも自然に出來て居る。三月堂の梵天帝釋の方は前者のやうに豊満ではな



東大寺戒壇院四天王の中

く、寧ろ崇高
典雅と評す
べきで、一種
いふべから
ざる神的な
性格を象徴
して居るや
うで、いはゆ
る形體と思
想の融合宜
しきを得て

居る。人或はこれを以てギリシヤ彫刻のアテーネ神の佛
のあるものと評するものも、あながち失當の言ともいはれな
い。戒壇院の四天王に至つては、表情權衡皆宜しきを得た



アテネ神像

は勿論、その全體に於て、彫刻に最も必要な安泰といふ條件
を有して居ることが、殊にその貴ぶべき點である。畢竟こ

上に、沈著篤實の趣
を具へて居る。

抑、天平時代の彫
刻は面貌・姿態・衣紋
等の諸點に於て精
妙なところのある

の安泰の趣は、精神が形體に充滿した時に始めて得られるもので、これに反するものは拘定・固着である。



像群ンーコオラ

複雑になつても、又いかなる活動状態にあつても、必ずこれを具備することを要するもので、西洋に於ける其の適例の一として、かのラオコーンの像を挙げれば自ら明らかにな

拘定・固着といふのは精神のないもの、或は精神はあつてもその活動の自由を缺いたものである。然るに安泰といふ條件は、その形がいかに

ることであらう。彫像に這般の安泰の趣を缺いて、人をして輕佻・不安の念を抱かしめるものは、決して眞に理想的な作品といふことは出来ない。天平彫刻の三作品の如きいづれもこの點に於て宜しきを得てゐるが、殊に戒壇院の四天王の如き、その性質の元來活動的なものに於て、よくこの條件を具へ得たのは讚嘆すべきことである。

又、天平時代には東大寺大佛の如き巨像も作られ、佛菩薩天部の像の外に、肖像彫刻の類にも亦見るべき物がある。その他伎樂の假面などにも、優秀なものが残つて居る。かくの如くその種類は甚だ雜多で、材料も銅・木・乾漆・塑土等種々な區別がある。以て當時の彫刻がいかに大きな發

達をして居たかを想見することが出来る。

天平期に次いで、鎌倉時代が彫刻の隆盛を極めた時代である。鎌倉期の作品として、代表的な物の中で殊に秀れて居るのは、鎌倉大佛・東大寺南大門の仁王であらう。鎌倉大佛は頗る自然に彌陀の尊容を表して、慈悲圓滿の相好内外人の等しく讚美するところである。



鎌倉の大佛

至つては、當時の巨匠運慶・湛慶兩人の手に成つたもので、その潤達な手法には、眞に驚くべきものがある。

要するに、この期の像は天平時代のに比して稍寫實に進み、且手法の巧妙を増進したことは事實である。而して尙看過すべからざること、は、日本的な要素の愈多く顯れて來たことであらう。

然るに遺憾なことは、我が國の彫刻は、鎌倉時代を最後として、足利期を經、徳川期に入つて漸く衰運に傾いて、その間殆ど何の見るべき物もなくなつた。けれども、偶像彫刻ならぬ金屬・木竹・甲角の類の工藝的彫刻が新に開拓せられて、この方面に於ては實に他に匹儔を見ざるまでの著しい進

歩を遂げたのである。

(瀧精一)

*文學博士
美術史學者
東京帝國大學教授

九 光の國

右舷に日出を見てゐた我々の船は、いつかそれを左舷に見るやうになつて、今やアフリカ大陸の西岸を、北へ北へと進んでゐるのであつた。

今はもうケープタウンから二千四百六十七哩の洋上にゐる。そして、子午線を越えて西へ向つたのは一昨日(十月二十九日)の午後であつた。今日は復び赤道を越えて南半球から北半球へ立返つて來た。これから毎日緯度を北へ算へなければならぬ。空中の温度はまた高まつて、今日

は八十二度を算するに至つた。

ケープタウンから三四日の間は、航海者には附物たるバトロスが船の後方から追つかけて來た。全長四五尺以上もある眞白な兩翼を一直線に擴げながら、この鳥はいつもマストの上から、後部甲板の上へかけ、風が吹いて來る方向へ頭を向け、全身に力を漲らして悠然と空中に浮かんでゐる。

「海の上で、風の方角を知らうと思つたら、この鳥を見さへすれば解ります、きつと風に向つてゐますからな」と、船員は教へてくれた。

そして船から流される食料品の屑などが、波の間に見え

浮かぶと、鳴き聲を立てながら、兩翼が水を打たんばかりに飛びおりて、それを掴みつ、啄みつする。時には四五十羽も群がつて黄金の光を空中に亂しつゝ、何處までもと船の後から追ひすがることがある。——時にはデヴィワツシアルヴァトロスと呼ばれる、黒い翼をしたものを見かけることがある。一層敏捷に、輕快に翔つてゐるが、それは決して群をなさない。白群に交つても、直つうつとぬけ出で、遠く近く孤獨で飛翔してゐる。

夜間はほかに物音なき空中に、ただこの鳥の羽搏きと、不思議な叫聲とが、空をめぐつて、流れ漂つてゐるばかりである。この鳥の叫聲の聞える限り、またこの鳥の姿が再び見

えだして來る時、我々は一種の生氣の空中に浮動するのを覺える。けれど、それも見えず、聞えずなつて、ただ圓を描く太い水平線のただ中を、十日以上も航して行く時は、一種單調な寂寞が人々の胸を壓して來る。日と日との區別がつかなくなり、長いやうな短いやうな、特色なき時間が過ぎて行く。

今日我々は赤道洋上の赫耀たる光の波に、目を向けることも出來ない眩耀さを感じてゐる。實際、赤道洋上にありては海そのもの、空そのものが、直ちに光である。

太陽は遮る何物もない上下の虚空に、何の遠慮もなく、何の隔意もなく、羞恥もなく、赤裸々の自己の姿を現して、燃ゆ

るがまま、溶けて流るるままに委せてゐる。圓らかな水平線、天と水とを劃するこの一線は、今日は、この溶けて流れ、燃えて漂ふ光を盛り上げる一大圓盤の縁を劃らんがために、引き繞らされてゐるもののやうに思はれる。

この時、深碧の潮の色と、黄金を流す日の光との混じ合ふ波の間から、音も立てず、無數に飛び出づる小さな銀色がある。この無數の小さな銀片の閃きは、今までは溶けて流れてとろく／＼してゐた單調な光の世界に、一種の生動を覺えさせる。

或ものはケープ、タウンの丘陵に靡く銀葉樹の葉の風に吹かれて翻るやうに、數十數百群をなして、小さな波を飛び

越えて、可成り遠く翔つたかと思ふと、先頭の一つが、はあつと波の上に身を落す。と、後から後から一列のものが同じ場所に悉く身を沈める。

細かい銀鱗に刻まるる日の光。

はてしなき大洋上に、見ゆる限りの唯一の生物。

彼等は日頃の己の棲所が日に暖められ、光に照らさるるのに愕いて、或は眩惑せられて、思はず銀鱗を振るひ立てて、飛ぶのであらう。或ものは銀白の群でなくて、半白な、あるひは眞黒な姿をして、一つまたは二つぐらゐづつて、稍鋭く、遠く波を掠めて飛ぶ。群をなす數百の銀白な飛魚の姿には、互に先きを争ふ惶しさと亂れとがある。そして思はず

誘はれて己の棲所は出たものの、空氣中の餘り晴々しいのと、光のあまりに眩しいのとで、急に身恥づかしく感じてでもするやうに、水の上を一町ほども飛ぶかと思ふと、不意に彈丸の水に飛び込むやうに、ばた／＼と、もとの波へ身を沈めてしまふ。――我々の温帯地方で、秋空に見る年若い渡鳥の群のやうである。

黒い稍大きな一つ二つで飛ぶ魚は、丁度隼のやうな鋭い勢と、淋しさとを見せてゐる。つうと波を切つて、一つ二つ黒いのが飛び上つて、水面を掠めて、やがて、高い波の中腹へ、つうつと飛び入つたかと思ふと、すぐその先きの方から散彈のやうに、無數の銀色の小片が一時に彈き出される。そ

れが水面へ散つたかと思ふと、すぐまた彼方此方に彈き出される。

寂しい波の戯れ。

高原地の、人間のゐない秋の野に、日を浴びて咲き充ちてゐる無數の花草の頭の、何の故とも知らず肯き合ふやうな華やかな寂しさ、永劫同じ黄金色の日の光、何處へも脱れて行くことの出来ない大洋の水、その恐ろしい單調さに耐へられないで、浪の飛沫が自づと翼を生じて飛び立つのであるまいか。

(吉江孤雁)

一〇 石を切り出す山

*
名は喬松
早稻田大學教授

眼前に屹立する

數十丈の大石壁、

切取られた、砥のやうな斷層面――

急激な石崖みちを下りて來て、

いま私たちは思ひかけぬ此の大風景の前に立つた。

これこそは自然の一大彫刻、

峨々たる灰白色の大建築、

聳え立つ千丈の大斷面、

――その下に立つ時は、人間は誠に眇たる一細片に過ぎない。

遠く近く、その作業をつづける石工の金鎚の音の外に

は、

其の朗々たる、空虚な、底知れぬ木靈こたまの外には、

山は闌として深い沈黙のうちに額ぬかづいてゐる。

日は照つてゐるけれども、

この半腹は一切陰のうちにある。

ただ、生ひ茂る杉や松の小枝が、

其の頂に、風に靡いて、

小さく、晴れわたつた青ぞらを掻き亂してゐるばかり

である。

心ない石工の

爆薬と小さい金錠の響から生まれ出た、此の自然の宏
大な彫刻。

無心に見入る吾々の眼には、
それは一の奇怪な大立像のやう、
その露出した自然の胸と胴は、

作意と技巧を超越した
不思議な神の製作の前に立つやうな氣さへ起させる。

間とした沈黙と、包藏の山中に立つて、

私は今、日々に其の姿を變へる、

宏大で、自然其のまゝ神の作爲を見る。

* 詩人

私は聞く、石工の空鳴りするハンマーの響を、
其の無心な作業のどの鑿もが、
立派に與へて行く、この驚くべき大偉業への參與を。

(百田宗治)

一、 靈 數

一茶は俳人中の俳人であるといふ事を知らぬ人にでも、
其の瀟洒として些の澁滞のない俳句は、きごちない實にか
らんでゐる人ではなかつたことを感ぜしむるのでありま
す。併しながら、此等は畢竟するに詼謔である。虚から出
た實と云ふよりも、虚から出た虚と云ふ方が至當であらう。

我が非運と外物への同情とて、終生涙の中に煩はしき浮世の實を洗ひ落して居た一茶は、輕妙と沈痛とを結び付けて、古今獨歩の感がある。

やよ風這へく、春の行く方へ。
やれ打つな蠅が手をする足をする。

きのふ寢し嵯峨山
見ゆるはるの雨
一茶



筆茶一

寢かへりをするぞ其處のけきりぎりす。
泣くなとて母の踊るや門の月。
おれと來てあそべや親のない雀。

門かすぞ啼かずに遊べ雀の子。
瘦蛙負けるな一茶是にあり。
米まくも罪ぞよ雞が蹴合ふぞよ。
雀の子そこのけそこのけ御馬が通る。

はつ雁やすすきは
まねく人は追ふ
一茶



筆茶一

杵先や頭あふない雀の子。
人中を猫も子ゆゑにぬすみ哉。
我が袖を親とたのむか逃げ螢。
魚どもや桶とも知らで門すずみ。

我が宿は何もないぞ巢立鳥。
あはれ蚊のから戻りする夜明哉。
我が味の柘榴に這はす虱かな。
蚤どもに松島見せて放ちけり。
逃るなり紙魚が中にも親よ子よ。
菊の花都の鬼がこれを食べふ。
人聲に子を引きかくす女鹿哉。
殺されにことしも來たよ小田の雁。
喧嘩すな相見互の渡鳥。
冬の蠅逃せば猫にとられけり。
人來たら蛙になれよ冷し瓜。

此等の句を靜かに誦めば、軽い涙が催される。私は餘程前「滑稽俳句集」といふ小冊子を見た時に、やれ打つな蠅が手をするの句を其の中で見まして、是が譯もなく滑稽と見られて居ることを淺ましく思つたことがありました。併し又一方から考へれば、此程深切な同情の表現を滑稽と見ることが出来る程、此の句は洒脱なものである。而して此處に數多擧げた句の様なもの、皆同一種類のものである。人に涙を催させる此の力は、勿論作家の偽りなき大なる同情の然らしむる處であります。其が飄々乎として情に破れず、何處までも澁滞のない輕妙な形で淡く現れて居るのは、其の實が虚から出でた爲であります。若しこれが逆に實

から出た虚であるとしたならば、どうであらうか。同情の實を稀薄にするといふだけの意味になつてしまふ。情を淡く現すと云つたのは、稀薄にして現はすといふ意味ではない。例へば、唯水へ投げ込めば其の重さで沈むものも、油を浮かべた水面では軽々と浮かぶことがある。淡く現はすと云ふ事は、其の物の水に沈まぬ程度に薄く削ることを云ふのである。

(松浦一)

一一一 尾形了齋覺え書

今般當村内にて切支丹宗門の宗徒共、邪法を行ひ、人目を惑はし候儀に付き、私見聞致し候次第を、逐一公儀へ申上ぐ

可き旨、御沙汰相成り候段、屹度承知仕り候。

陳ふれば、今年三月七日、當村百姓與作後家篠と申す者、私宅へ参り、同人娘里(當年九歳)大病に付き、檢脈致しくれ候様懇々頼み入り候。

右篠と申し候は、百姓惣兵衛の三女に有之、十年前與作方へ縁付き、里を儲け候うて、程なく夫に先立たれ、爾後再縁も仕らず、機織り乃至賃仕事など致し候うて、その日を糊口し居る者に御座候。なれども、如何なる心得違ひにてか、與作病死の砌より、専ら切支丹宗門に歸依致し、隣村の伴天連(伴天連)るどりげと申す者方へ繁々出入致し候間、當村内にても種々取沙汰致す者なども有之、兎角の批評絶え申さず。依つて

父惣兵衛始め姉弟共一同種々意見仕り候へども、泥烏須如來より難有きもの無しなど申し候うて、一向に合點仕らず。朝夕唯娘里と共に、くるすと稱へ候小さき磔柱形の守本尊を禮拜致し、夫與作の墓參さへ怠り居る始末に付き、唯今にては親類縁者とも義絶致し居り、追つては村方にても村拂ひに行ふ可き旨、寄りく評議致し居る由に御座候。

右様の者に候へば、重々頼み入り候へども、私檢脈の儀は、叶ふまじき由申し聞け候所、一度は泣くく歸宅致し候へども、翌八日、再び私宅へ參り、一生の恩に着申す可く候へば、何卒御檢脈下され度など申し候うて、如何様斷り候うても、聞き入れ申さず、はては、私宅玄關に泣き伏し、御醫者様の御

務は人の病を癒やす事と存じ候。然るに私娘大病の儀、御聞き棄てに遊ばさる、條、何とも心得難く候。など怨じ候へば、私申し候は、貴殿の申し條、萬々道理には候へども、私檢脈致さざる儀も、全くその理無しとは申し難く候。何故と申し候はば、貴殿平生の行狀誠に面白からず。別して私始め村方の者の神佛を拜み候を、惡魔外道に憑かれたる所行なりなど屢誹謗致され候由、確と承り居り候。然るに、その正道潔白なる貴殿が私共天魔に魅入られ候者に、唯今娘御の大病を癒やしくれよと申され候は、何故に御座候や。右様の儀は日頃御信仰の泥烏須如來に御頼みあつて然る可く、もしたつて、私檢脈を所望致され候上は、切支丹宗門御歸依

の儀、以後堅く御無用たる可く候。此の段御承引無之に於ては、醫は仁術なりと申し候へども、神佛の冥罰も恐ろしく候へば、檢脈の儀平に御斷り申し候。斯様説得致し候へば、篠もさすがに推してとも申し難く、其の儘すごく歸宅致し候。

翌九日は、ひき明け方より大雨にて、村内一時は人通りも絶え候所、卯時ばかりに、篠傘をも差さず、濡鼠の如くなりて、私宅へ参り、又々檢脈致しくれ候様、頼み入り候間、私申し候は、長袖ながら二言は御座なく候。然れば娘御の命か、泥烏須如來か、何れか一つ御棄てなさる分別肝要と存じ候。斯様申し聞け候へば、篠今度は狂氣の如く相成り、私の前に再

三額づき、又は手を合はせて拜みなど致し候うて、仰せ千萬御尤もに候。なれども、切支丹宗門の教にて、一度ころび候上は、私の魂軀とも、生々世々亡び申す可く候。何卒私の心根を不便と思召され、此の儀のみは御容赦下され度候。など搔き口説き咽び入り候。邪宗門の宗徒とは申しながら、親心に二つ無き體相見え、多少とも哀れには存じ候へども、私情を以て公道を廢す可からざる道理に候へば、如何様申し候うても、ころび候上ならでは檢脈叶ひ難き旨申し張り候所、篠何とも申し様なき顔を致し、少時私の顔を見つめ居り候ひしが、突然涙をはらくと落し、私の足下に手をつき候うて、何やら蚊の様なる聲にて申し候へども、折からの大雨

の音にて、確と聞き取れ申さず。再三聞き直し候上、漸く、然らば詮なく候へば、ころび候可き趣判然致し候。なれども、ころび候實證無之候へば、右證明を立つ可き旨申し聞け候所、篠無言の儘懷中より、彼のくるす、を取り出し、玄關式臺上へ差し置き候うて、靜かに三度なで踏み候。其の節は格別取り亂したる氣色も無之、涙も既に乾きし如く思はれ候へども、足下のくるすを眺め候眼の中、何となく熱病人の様に、私方の下男など皆々氣味悪しく思ひし由に御座候。

扱私の申し條も相立ち候へば、即刻下男に藥籠を擔はせ、大雨の中篠を同道にて、同人宅へ參り候所、至極手狭なる部屋に里一人南を枕にして打臥し居り候。尤も身熱烈しく

候へば、殆ど正氣無之體に相見え、いたいけなる手にて、繰返し、繰返し、空に十字を描き候うては、頻りにはるれやと申す語を現の如く口走り、其の都度嬉しげに微笑み居り候。右はるれやと申すは、切支丹宗門の念佛にて、宗門佛に讚頌を捧ぐる儀に御座候由、篠其の節枕邊にて泣くく、申し聞かせ候。依つて、早速檢脈致し候へば、傷寒の病に紛れ無く、且手遅れの儀も有之、今日中にも、存命覺束なかるべきやに見立て候間、詮方無く其の旨篠へ申し聞け候所、同人又々狂氣の如く相成り、私ころび候仔細は、娘の命助けたき一念よりに御座候。然るを、落命致させ候うては、其の甲斐更に無かる可く候。何卒泥烏須如來に背き奉り候私の心苦しさを

御汲み分け下され、娘が一命如何にもして御取留め下され度候。と申し、私のみならず、下男の足下にも、手をつき候うて頻りに頼み入り候へども、人力にては如何とも致し難き儀に候へば、心得違ひ致さざる様くれぐれも申し諭し、煎薬三貼差置き候上、折柄の雨止みを幸、立歸らんと致し候所、篠私の袂にすがりつき候うて離れ申さず。何やらん申さんとする氣色にて唇を動かし候へども、一言も申し果てざる中に、見る／＼面色變り、忽ち其の場に悶絶致し候。然れば、私大いに仰天致し、早速下男共々介抱仕り候所、漸く正氣づき候へども、最早立ち上り候氣力も無之、所詮は私の心淺く候まゝ、娘の一命、泥烏須如來二つながら失ひしに極まり候。と

て、さめざめと泣き沈み、種々申し慰め候へども、一向耳傾くる體も御座なく、且娘の容態も詮無く相見え候間、已むを得ず再び下男召連れ、勿々歸宅仕り候。

然るに、其の日未時下り、名主塚越彌左衛門殿母儀檢脈に參り候所、篠が娘死去致し候由、並に篠悲歎の餘り遂に發狂致し候由、彌左衛門殿より承り候。右に依れば、里の落命致し候は、私檢脈後一時の間と相見え、已の上刻には、篠既に亂心の體にて、娘の屍體を搔き抱き、聲高に何やら蠻音の經文讀誦致し居りし由に御座候。猶此の儀は彌左衛門殿直に見受けられ候趣にて、村方嘉右衛門殿藤吾殿、治兵衛殿等も其の場に居合はされし由に候へば、千萬實事たるに紛れ無

かるべく候。

翌十日は朝來小雨有之候へども、辰の下刻より春雷を催し、稍晴れ間相きざし候折から、村郷士柳梁金十郎殿より迎への馬差遣はされ、檢脈致しくれ候様申し越され候間、早速馬上にて私宅を立ち出で候所、篠宅の前へ來かゝり候へば、村方の人々大勢佇み居り、伴天連よ、切支丹よなど罵り候うて、馬を進め候事さへ叶ひ申さず。依つて私馬上より家内の容子差し覗き候所、篠宅の戸を開け放ち候中に、紅毛人一名、日本人三名各法衣めきし黒衣を着し候者共、手に手に彼のくるす乃至香爐様の物をさしかざし候うて、同音にはるれや、はるれやと唱へ居り候。加之、右紅毛人の足下に

は、篠髪を亂し候まゝ、娘里を搔き抱き候うて、失神致し候如く蹲り居り候。別して、私の眼を驚かし候は、里兩手にてひとと篠の頸を抱き居り、母の名とはるれやと代るゝあどけ無き聲にて唱へ居り候事に御座候。尤も、遠眼の事とて確とは辨へ難く候へども、里血色至極麗しき様に相見え、折母の頸より手を離し候うて、香爐様の物より立ち昇り候煙を捉へんとする眞似など致し居り候。然れば私馬より下り、里蘇生致し候次第に付き、村方の人々に委細相尋ね候へば、右紅毛の伴天連、どりげ儀、今朝伊留滿共相從へ、隣村より篠宅へ参り、同人懺悔聞き届け候上、一同宗門佛に加持致し、或は異香を焚き薫らし、或は神水を振り濺ぎなど致し

候所、篠の亂心は自ら静まり、里も程無く蘇生致し候由、皆々恐ろしげに申し聞かせ候。古來一旦落命致し候上、蘇生仕り候類、元より少からずとは申し候へども、多くは酒毒に中り、乃至は瘴氣に觸れ候者のみに有之、里の如く傷寒の病にて死去致し候者の、還魂仕り候例は未だ嘗て承り及ばざる所に御座候へば、切支丹宗門の邪法たる儀此の一事にても分明致す可く、別して伴天連當村へ參り候節、春雷頻りに震ひ候も、天の彼を惡ませ給ふ所かと推察仕り候。

猶、篠及び娘里當日伴天連ろどりげ、同道にて、隣村へ引移り候次第、並びに慈元寺住職日寛殿計らひにて、同人宅燒棄て候次第は、既に名主塚越彌左衛門殿より言上仕り候へば、

私見聞致し候仔細は、荒々右にて相盡き申す可く候。但し、萬一記し洩れも有之候節は、後日再應書面を以て言上仕る可く、先づは私覺え書斯くの如くに御座候。以上。

申年三月二十六日

伊豫國宇和郡——村

醫師 尾形了齋

(芥川龍之介)

*文學士
英文學者
小説家

*藤岡作太郎
文學博士

一三 愛兒の死の前に

三十七年の夏、東圃君が家族を携へて歸郷された時、君には愛らしい女の子があつた。昨年、夏、君は意外にも小田

原の寓居に、此の掌中の珠を失はれたので、余は前年旅順で戦死した弟のことなど引いて、力を盡くして君を慰めた。然るに何ぞ圖らん、今年の一月、余は六つになつた次女を失うて、君に慰められる身となつた。

今年の春或用事の爲に東京に出て、君の家に投じた。君と余とは中學以來の親友である。殊に今や同じ悲哀を懷いて、久し振りに相見たのである。いつも會ふ時のやうな心持ばかりではなかつた。然るに、手紙の上では互に慰め、慰められてゐながら、面と相向うた時は、唯軽く弔辭を交換したばかりであつた。逗留七日、積る話はそれからそれと盡きなかつたが、遂に一言も亡兒のことには及ばなかつた。

唯出立の際、君は筐底を探つて一束の草稿を取出して、亡兒の終焉記なれば見てくれよといつて示された。君と余と相會うて、談亡兒のことに及ばなかつたのは、互に其の事を忘れてゐたのではない、又堪へ難い悲哀に觸れ、苦悶を新にすることを恐れたのでもない。實は誠といふものは言語に表し得べきものでなく、言語に表し得べきものは淺薄なものであり、虚偽なものであり、至誠は相見て相言ふ能はざる所に存するからである。我等の相對して相言ふ能はざりし所に、言語はおろか、涙にも表すことのできない、深い同情の流が心の底から底へと通うてゐたのである。我が子を亡くした深い悲哀が、年と共に消えて行くあさ

まじさに、せめて後の思出にもと、死んだ子の面影を書き残した。これを直ちに東圃君に送つて一言を求めたことがあつた。當時眞に余の心を知つてくれる人は、君の外にないと思つたからである。然るに、君は余よりも前に同じ思で同じ事を企てられたのである。余は君の終焉記を行李の底に收めて歸つた。讀んで見て、人の心の誠は斯くまで同じきものか、とつくづく感じた。

回顧すれば、十四歳の頃であつた。余は最も親しかつた姉を失うて、生來始めて死別の悲しみを知つた。人無き處に至つて思ふまゝに泣いた。稚心に、代られるものならば、姉に代つて死にたいと心から思つたことを今も記憶して

ゐる。又三十七年の夏には、悲慘な旅順の戦に、唯一人の弟が敵壘深く屍となつて其の遺骨を收むることも出来なかつた。此の斷腸の思が未だ全く消え失せないのに、またここに愛兒の一人を失ふこととなつたのである。骨肉の情いづれ疎なるはなけれども、特に親子の情は深い。此の度生來未だ曾て知らなかつた沈痛な經驗を得て、余は一々君の心を讀むことが出来た。亡き我が子の可愛いといふには、何の理由もない。唯わけもなく可愛いのである。「これまでにして亡くしたのはさぞ惜しからう」といつて悔やんでくれる人がある。しかしさういふ意味で惜しむのではない。「女の子でよかつた」とか、「外に子供もあるから」とかい

*
ロシアの小説家
(1821—1881)

つて、慰めてくれる人もある。しかし、さういふことで慰められるものではない。ドストエフスキーが愛兒を失つた時、又出来るだらう。といつて慰めた人があつた。すると、氏はこれに答へて、「外の子供ぢや仕方がない。私はソニヤが欲しいのだ」といつたといふことである。

親の愛は純粹である。其の間一毫も利害得失の念を挟む餘地がない。唯亡兒の佛を思ひ出づるにつけて、無限に懐かしく、可愛く、どうかして生きておてくれ、ばよかつたと思ふ。老いも若きも死ぬるのが人生の常だ、死んだのは我が子ばかりでないと思へば、理に於ては少しも悲しむべき所はない。しかし、人生の常事であつても、悲しい事は悲

*
米の文學者
(1783—1850)
*
小品文集

しい、飢餓は人間の自然であつても、飢餓は飢餓であるやうに。死んだものは何としても還らぬから諦めよ、忘れよといつてくれる。併し、これは子を亡つた親に取つては堪へない苦痛である。時は凡ての傷を癒やすといふのは、自然の恵でもあらうが、一方より見れば、それは人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念を残してやりたい、せめて我が一生だけは思出してやりたいといふのが、親の誠である。昔、君と机を並べてアービングのスケッチブックを讀んだ時、他の心の疵や苦しみはこれを忘れ、これを治せんことを欲するが、獨り死別といふ心の疵は、人目を避けても、これを温め、これを抱かうと思ふといふやうな言葉

を讀んだ。今になつて誠に此の言葉が思ひ合はされるのである。折に觸れ物に感じて思ひ出すのが、せめてもの慰藉である。死者に對しての心づくしである。此の悲しみは苦痛といへば誠に苦痛であらう。併し親は此の苦痛の去ることを欲せぬのである。

古語
紀貫之の土佐日記
中の語

「死にし子顔よかりき。」をんな子の爲には親幼くなりぬべし。など、古人も言つたやうに、親の愛はまことに愚痴である、冷靜に外から見たならば、たはいもない愚痴と思はれるであらう。併し余は今度此の人間の愚痴といふものの中に、人情の味のあることを悟つた。カントがいつた如く、物には皆直段がある、獨り人間は直段以上である、目的其の物

獨の哲學者
(1724—1804)

である。如何に貴重な物でも、それは唯人間の手段として貴重なのである。世の中に人間ほど尊い者はない。物はこれを償ふことが出来るが、如何につまらぬ人間でも、一の靈魂であるからは、他の物を以て償ふことは出来ぬ。而して此の人間の絶對的價値といふことが、己が子を失うたやうな場合に、最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテが其の子を失つた時、Over the dead (死者以上)といつて仕事を續けたといふが、ゲーテにして此の語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なものがあつたであらう。併し人間の仕事は人情といふことを離れて外に目的があるのではない、學問も事業も究竟の目的は人情の爲にするのである。

獨の文學者
(1749—1832)

*山川草木轉荒涼、
十里風腥新戰場、
征馬不_レ前人_レ不_レ語、
金州城外立_二斜陽_一。

而して人情といへば、たとへ小なりと雖も、親が子を思ふより痛切なものなからう。徒に高く構へて、人情自然の美を忘るゝものは、却つて其の性情の卑しきを示すに過ぎない。「征馬不前人不語、金州城外立斜陽」の一詩あつて、愈乃木將軍の人格が仰がれるのである。

とにかく余は今度我が子のはかなき死といふことに由つて、多大の教訓を得た。名利を思うて煩悶絶間なき心の上に、一杓の冷水を浴びせかけられたやうな心持がして、一種の涼味を感じると共に、心の奥より秋の日のやうな清く温き光が照らして、凡ての心の上に純潔な愛を感じることが出来た。特に深く我が心を動かしたのは、今まで愛らし

く話したり、歌つたり、遊んだりしてゐたものが、忽ち此の世から消失して壺中の白骨となるといふ事實であつた。若し人生はこれだけのものであるといふならば、人生ほどつまらぬものはない。此處には深い意味がなくてはならぬ。人間の靈的生命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決するといふのが、人生の一大事である。死の事實の前には、生は泡沫の如くはかないものである。死の問題を解決し得て始めて眞に生の意義を悟ることが出来る。

物窮すれば轉ずる。子の死を悲しむ、やる瀬なき親の悲哀、悔恨は、自ら人心を轉じて、何等かの慰安の途を求めしめる。夏草の上に置ける朝露よりもあはれはかなき一生を

送つた我が子の身の上を思へば、如何にも斷腸の思がする。併し翻つて考へて見ると、子の死を悲しむ余も、遠からず同じ運命に服従せねばならぬ。悲しむものも、悲しまれるものも、同じ青山の土塊と化して、唯松風・蟲鳴のみ残る。いづれを先いづれを後とも見分け難いのが、人生の常である。永久なる時の上から考へて見れば、何だか滑稽にも見える。生れて何の發展もなさず、何の記憶も残さず、死んだとて悲しんでくれる人だにないと思へば、まことにあはれである。併し如何なる英雄も孩兒も、死に對しては何の意味も有たない。神の前には凡て同一の靈魂である。オルカニヤの作といひ傳へてゐる畫に、死の神が老若男女あらゆる種類

の人を捕へ來つて、帝王も、乞食も、皆一堆の上に積み重ねてゐるのがある。榮辱得失もこゝに至つては一場の夢に過ぎない。又世の中の幸福といふ點から見ても、生きのびるのが幸であつたらうか、死んだのが幸であつたらうか。生きてゐたらば幸であつたらうといふのは、親の欲望である。運命の祕密は我々にはわからない。特に高潔な精神的要求より離れて、單に幸福といふことから考へて見たなら、凡て人生はさほど慕ふべきものであるか、どうか、疑問である。一方より見れば、生れて何等の人世の罪惡にも汚れず、何等の人世の悲哀をも知らず、唯日々嬉戯して、最後に父母の膝を枕として死んで行つたと思へば、非常に美しい生涯であ

つたといふ感じがする。花束を散らしたやうな詩的な一生であつたとも思はれる。たとへ多くの人に記憶され、哀惜されずとも、懐かしかつた親の心に刻める深い記念、骨にも徹する痛切な悲哀は、寂しい死をも慰め得て餘りあるとも思はれる。

如何なる人も、我が子の死といふことに對しては、種々の迷を起さぬものはなからう。あれをしたらばよかつた、これをしたらばよかつたなど、思うて返らぬことながら、徒なる後悔の念に心を悩ますのである。併し、何事も運命と諦めるより他はない。運命は外から働くばかりでなく、内からも働く。我々の過失の背後には不可思議の力が支配し

*
親鸞の著

てゐるやうである。後悔の念の起るのは、自己の力を信じ過ぎるからである。我々はかゝる場合に於て、深く自己の無力なるを知り、己を棄てて絶大の力に歸依する時、後悔の念は轉じて懺悔の念となり、心は重荷を卸した如くなり、自ら救ひ、又死者に詫びることが出来る。歎異鈔に「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり」といへる尊き信念の面影をも窺ふを得て、無限の新生命に接することが出来る。

(西田幾多郎)

一四 靈より肉へ、肉より靈へ

*
文學博士
哲學者
京都帝國大學教授

日本人の生活には、他の文明國に見られない現象がある。「居候」「食客」といつて、何等の理由もなく、權利もなくして、他人の家に居住し、他人の物を食ひつぶしてゐるもののあるのもそれである。妻の爲に、鬼千匹といはれる小姑といふもののあるのもそれである。又教育界に、生徒が其の師に對して同盟して反抗するといふ、恐ろしい惡むべき學校騒動といふ珍現象のあるのもそれである。

斯かる現象は、表面から見れば千差萬別で、各皆異なる原因から起るやうに見えるが、其の根本を探つて見ると、實は唯一つの缺陷に基因してゐることを知るのである。私は此の缺陷を、平易な日常生活の現象から歸納して、指摘した

いと思ふ。

英米人の生活と我々日本人のそれとを較べると、其の根本に於て、靈と肉と、精神と物質と、温情主義と權利・義務と、感情生活と合理思想と、道德思想と科學思想と、家族主義と個人主義と、さういふ二つの者の關係が、全く反對の方向を取つてゐる。我は甲より乙へ赴かうとし、彼は乙より甲へ向つて進んで行く。日本人にして若し眞面目に生活改造の問題を解決しようと思ふならば、何よりも先に此の關係を考へて、其處に出發點を置き、根柢を据ゑねばならぬ。

日本流の旅館に泊ることは、今の私達に取つては、確に不愉快な事の一つである。此の好風景に富んだ國でありな

がら、旅行を不愉快ならしむる最大原因は、旅館と旅客の誤つた關係である。詳しくいへば、旅館と旅客の關係が、純然たる物質主義の算盤勘定の合理的基礎の上に立つてゐない事である。

西洋流のホテルでは、旅客は先づ日本の帳場格子に相當すべきオフィスに行く。そして一晩幾圓の室、一人床、浴場付き、何々と此方の希望することを注文すれば、それで済む。番頭がじろくくと人の服装や人相を見て、豊かさうな客は上等の室に通し、敝衣・破帽の客は穢い室に通すといふやうな不都合はない。旅館と宿泊者の關係が、純然たる、そして露骨な賣買關係であり、算盤勘定であるから、豫め帳場で契

約すれば、それ以上の面倒はないのである。出立の際の仕拂も、洗濯代幾ら、料理代幾らと明細に書き付けられただけ拂へばよい。茶代といふ愚劣なものは、鑑一文たりとも受取りもしなければ、拂ひもしない。

それならば、ホテルは宿泊者に對して冷々淡々、恰も路傍の人を遇するやうであるかといへば、決してさうでない。各室は壁で仕切り、戸には錠をおろして置き、構造は如何にも個人主義的であるから、客と客との間には何の親しみもなく、不愉快であるかといふに、さうでない。反對に我が國の旅館では、各室は襖障子で仕切られただけで、如何にも旅館全體が家族的に融和してゐるやうな構造でありなが

ら、實は其の襖障子は鐵筋コンクリートの壁より嚴しい、冷かなものである。其の上に、多くの宿泊客が集まつて親しく談笑すべき廣間の設備さへない。偶廊下で互に顔を合はせても、人を見たら盜賊と思へ」と警戒の眼を以て睨み合ふ。個人主義から出發して、それで徹底した結果として溫情的なのが、西洋流のホテルである。忙しい番頭や支配人までが、閑暇を見繕つては出て來て客と無駄話をする。珍しい外國人と見れば、誰彼となく奇問・愚問に話の花を咲かす。長逗留の間に親しくなれば、友愛關係が出來、溫情が湧き、情愛が生れる。此の友愛、此の溫情、此の情愛は、純然たる算盤勘定と露骨な賣買・貸借の契約關係を基礎とし、根柢と

して、それから發生したものに他ならないのである。

日本流の旅館では親類か知人の家に泊るやうに、最初から金錢の事など問題にしてゐないやうに粧うてゐる。茶代といふ一種の贈物をやると、其の返禮に手拭やその土地の産物などを客に贈る。主人や番頭が出て來て、眞の溫情・友愛の籠らぬ、紋切形の挨拶を述べる。友人關係の如く、贈答關係の如く、待遇懇切を盡くすやうでも、實は帳場でこつそり算盤を弾いてするのだから、その友愛・懇切には、少しの溫味もなければ、旨味もない。だから日本の旅館の泊り心ちは不愉快である。西洋のホテルのは、物質から涌いた精神である、物から出た心である。殺風景な權利・義務の關係

から涌き出た温情である。精神であり、温情であるだけ、此の方が寧ろ旅客には愉快に感ぜられる。

師匠に贈る謝金、醫者に拂ふ診察料、畫家に拂ふ畫料、これ等は奉書に包み水引を掛け、熨斗を附け、場合によつては盆に載せ、袱紗に包むのである。これらは物質と勞力の浪費であるばかりでなく、精神的要素を以て物質的要素の不足を誤魔化さうとする悪風であり、靈から精神から出發してゐると見せかけて、實は肉に落ち、物質に歸着したものであるまいか。

月謝でも、診察料でも、畫料でも、それは勞働に對する純然たる報酬である。純情から出た贈呈品でもない物を贈呈

品であるかに見せかけて、金錢の授受を行ふのは不都合である。受ける方で、包紙を開いて見て、それを不當の少額であると認められた場合にも、これに抗議を申出でる權利を有しながら、水引や熨斗の避雷針に妨げられて、泣寝入りにしてしまはねばならぬ。

西洋人の行き方は金錢を義務として仕拂ひ、權利として受けるのだから、裸の金錢で差支がない、水引熨斗をつける必要もない。合理的な基礎に立つて、其處に情趣は涌くものだから、寸志だからと挨拶もすれば、有難うと禮も述べる。其處に眞の温みがある。

これ等の夥しい例から考へて、我が從來の生活の缺陷の

根柢を明らかに意識して、これを改善したい。我が國人は何事にも唯心的に、精神的に、人情主義や理想主義から出發する。合理的・物的の基礎なしに、仁義を説き、禮を重んじ、信を貴ばうとする。若しそれで昔のやうに満足し得られ、ばよいが、武士は食はねど高楊子の封建時代が遠い過去の夢となつて、今日の經濟組織・社會組織の世となつては、靈から肉への行き方では満足されなくなつてゐる。寧ろ衣食足つて禮節を知る古い教の通り、肉より靈へ、物的から人情へ、權利・義務から情愛への合理的な自然な行き方を取るべき時代となつてゐる。今日の我が國民が、生活の矛盾・不統一に悶へてゐるのは、此の行き方と時代の相容れない缺陷

があるからである。

現實主義に徹底すれば、其の底から理想主義が湧き出でる。唯物論を奥の奥まで押して行けば、必ず其處に唯心論の光が射して来る。我が國人は此のどちらにも徹底しないから、其の生活に安定を缺いてゐる。昔の印度人のやうに唯心的にもなれず、今日の米國人のやうに唯物的にもなれぬから、世界を動かす大思想・大文明を生み出し得ないものである。

人間として最も立派な生活は、いふまでもなく靈と肉と、内容と外形との間に、渾然たる調和あり融合ある生活である。肉に徹底したこともなく、物質に行詰つたこともなく、

内容に充實のないものの生活に、此の調和・融合はない、大きい、深い、廣い精神生活はない。世界の晴の舞臺に花々しく立つことになつた今の我が國の青年は、先づ、此の「靈より肉へ、肉より靈へ」の根本問題に就いて熟考すべきである。

(厨川白村の文に據る)

一五 我が帝國の二大問題

現時の我が日本帝國は國家として解決すべき二個の大問題を有す、其の一は、年々増加し行く七十萬乃至八十萬の人口を如何に處置すべきか。其の二は、東亞の先覺者として、如何にして黃人種の位置を高め、東亞の平和を維持す

べきか。前者は國家の自衛にして、後者は帝國の世界に對する使命の踐行なり。

如何なる反帝國主義論者と雖も、苟も國家の存立を否定せざる限りは、よも此の二問題の解決を迴避せよと放言し得る者はあらず、特に前者の解決の如きは帝國焦眉の急務たらずんばあらず。

世界は尙廣漠たる空地に乏しからざるに、帝國民が大手を振りて、此に赴くを得べき場所は果して幾ばくあるか。茫々たる坤輿何處を見廻しても、「日本人來るべからず」日本人此の中に入るべからずの「高札を立てざる地は殆どこれなきにあらずや。排日の本家・本元なる米國は勿論、濠洲に

ても、南阿にても、加奈太にても、凡そ土地の多きに苦しみ、人口の少きに苦しめる地方に於て、一として然らざるはなきにあらずや。我が接壤地たる滿洲・蒙古・西伯利亞の如きさへも、亦殆ど我が國民の入來を沮遏し、其の事業經營を妨害するを以て、其の政策とせざるはなきなり。今や我が大和民族は自ら求めて籠城せんとするにはあらざれども、世界より渺たる此の島國內に封じ込められんとするなり。我が國民は此の痛楚なる事實を如何に見るか。

四海兄弟、人類同胞、我等は相愛・相親の道を行ふ者なりとは、自ら基督教國民と稱する泰西人のいふ所なり。されど事實に於ては、彼等のなす所はこれと全然反對なり。而し

て彼等は平氣なるのみならず、却つて得意とするが如し。彼等は我が日本人をば列車の三等客の如く、狭き一室に立錐の地なきまでに叩き込み、詰め込み、自らは貸切の札を掛けて、寝ても、轉がりても、踊りても自由なる室を占領したり。これ世界現在の事實なり。

吾人はかゝる事實を見つゝ、これを我が日本國民の宿命として諦むべきか。將世界の一角に此の時と共に愈過剰に赴ける人口の出口を求むべきか。これ經國問題たるのみならず、寧ろ人道問題に非ずや。しかも、我が國家・國民は手を拱してただ自然の成行に一任せり。かくて、我が國民は世界の隨處に於て、恰も野ら犬同様の待遇を受け居るな

り。随つて赴けば、随つて追ひ拂はれ、偶、土著すれば、乍ち迫害を被り、其の稼ぎ溜めたる財産さへも、動もすれば没收せられんとするなり。これをしも忍ぶべくんば、孰れをか忍ぶべからずとせん。

此の如くして、我が人口は日に多きを加へ、我が國民の行き得べき地は日に少きに赴けり。爲に社會問題は高峰より墜つる石の勢を以て、我が社會を脅威す。これ實に明治三十七八年役以後、我が國家國民の苟且偷安の結果にして、固より他に向つて不平・不足を唱ふべきにあらず。

次に東洋平和の問題に就いて考へよ。西伯利亞は如何、支那は如何。西伯利亞に於ける露國の勢力の南下は、往

々我が滿蒙に於ける既得權を脅せり。支那に於ては未だ南北の一和を見ず。南北和平の事は支那國內の事なりと雖も、彼の國の動亂の我が國に及ぼす影響の大なるを思はば、誰か感心せざらんや。

支那と我が國との關係に於ても、亦實に痛歎すべきものあり。日支の親善を説くものは多けれども、その實行に邁進する者は甚だ少く、偶、これありといへども、實績の見るべきものは極めて稀なり。國民性の相違は如何ともし難しと雖も、二千年來の關係を以て、なほ兩國民の間に眞の理解の存せざるは遺憾とせざるを得ず。

要するに、我が日本は東亞の先覺者、東亞平和の保持者た

る使命に辜負したるのみならず、帝國としての國策をすら思ふ様に行ふ能はざる壓迫を、世界各方面より受くるに至りたるは、抑、何の故ぞ。思ふに、これ一に、三十七八年役後、國民氣滿ち、意驕りて、我が帝國の進運は自然に來るものの如く、妄信し、國民の精力を集中して、舉國一致、此の二大問題の解決に務むる意氣を喪失したる故に、他ならず。國民大いに自警奮發せずして可ならんや。

徳富蘇峯

*名は猪一郎
評論家
國民新聞社長兼主筆

一六 徒然草より

(一) 石清水

仁和寺に或法師、年よるまで石清水を拜まざりければ心

憂くおぼえて、或時思立ちて、唯一人徒歩より詣でけり。極樂寺・高良など拜みて、かばかりと心得て歸りけり。さて、かたへの人にあひて、年頃思ひつる事果たし侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に、山へ登りしは何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ずとぞいひける。少しの事にも先達はあらまほしきわざなり。

(二) 和漢朗詠集

或者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、或人御相傳浮ける事には侍らじなれども、四條大納言擇ばれたるものを道風書かむこと、時代や違ひ侍らむ、おぼつか

なくこそといひければ、さ候へばこそ世にありがたきものには侍りけれ。とて彌、祕藏しけり。

(三) もろ矢

或人弓射る事を習ふにもろ矢をたばさみて的に向ふ。師のいはく「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、始めの矢に等閑の心あり。毎度唯得失なく、此の一矢に定むべしと思へ」といふ。僅かに二つの矢師の前にて一つをおろかにせむと思はむや。懈怠の心、自ら知らずと雖も、師之を知る。この誠萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇に修せむことを期す。況や一刹那の内に於

て懈怠の心ある事を知らむや。何ぞ唯今の一念に於て直ちにすることの甚だ難き。

(四) 高名の木のぼり

高名の木登りといひし男、人を掟て、高き木にのぼせて梢を切らせけるに、いと危く見えし程はいふ事もなく、下る時に軒だけばかりになりて、過ちすな、心して下りよ。と言葉を掛け侍りしを、かばかりになりては、飛下るゝとも下りなむ。いかにかくいふぞ。と申し侍りしかば、その事に候。眼くるめき、枝危き程は、己が恐れ侍れば申さず。過ちは易き所になりて必ず仕る事に候。といふ。あやしき下藤なれども、聖人の誠に適へり。鞠も難き所を蹴出して後やすく

思へば必ず落つと侍るやらむ。

(五) 佛問答

八つになりし年、父に問ひて曰く、「佛は如何なるものにか候らむ」といふ。父が曰く、「佛には人のなりたるなり」と。又問ふ、「人は何として佛にはなり候やらむ」と。父また「佛の教によりてなるなり」と答ふ。又問ふ、「教へ候ひける佛をば何が教へ候ひける」と。又答ふ、「其の亦先の佛の教によりてなり給ふなり」と。又問ふ、「その教始め候ひける第一の佛は如何なる佛にか候ひける」といふ時、父空よりや降りけむ、土よりや湧きけむ」といひて笑ふ。「問ひつめられて、え答へずなり侍りつ」と諸人に語りて興じき。

一七 俊 寛 (一)

船は俊寛の苦悶などには何の容赦もなく、半刻も経たない裡に、水平線に漂ふ白雲の裡に紛れ込んで了つた。船の姿を見失うた時、俊寛は絶望の爲に昏倒した。昨夜來叫び續けた疲労が一時に發したのだらう、其の儘ぼうつとして眠り續けた。

彼は巖壁の上で昏倒した儘、何時間眠つてゐたかは自分にもわからなかつた。一度目覺めた時は夜であつた。彼は自分の頭の上の大空が大半暗い雲に掩はれ、その僅かな切目から二、三の星が瞬いて居るのを見た。彼は烈しい渴と全身を碎くやうな疼痛を感じた。

彼は水を飲みたいと思ひながら周圍を見廻した。が、巖壁の背

後はすぐ礪确はりかくな山になつて居るらしく、小川とか泉とかがありさうにも思へなかつた。それでも、烈しい渴は彼を一刻もぢつとしてゐさせなかつた。彼は寢てゐた巖から身を剥がすやうにして立上つた。立上る時、身體の諸の關節が音を立てて軋きるやうに思はれた。彼はそれでも這ふやうにして巖壁を降ることが出來た。彼は晝間——それは昨日であるのか一昨日であるのかわからなかつたが——夢中で走つた道を二町ばかり引返した。彼は晝間其處を走つた時、榕樹ろうじゆが五六本生えてゐて、其の根に危く躓つきさうになつたのを覺えてゐた。彼の濁つて了つて居る頭の中でも、榕樹の周圍を探せば水があるかも知れないと云ふ考がぼんやり浮かんでゐた。

が、榕樹の生えて居る周圍を、海の水明りで二三次探して廻つて

見たけれども、其處から一面に唐竹が密生して居るだけで、水らしいものは少しも見當らない。俊寛はその搜索に残つてゐた精力を使ひ盡くして、崩れるやうに地上へ横たはると、再び昏々として眠り始めた。

二度目に目が覺めた時、それは朝だつた。疲れ萎しびて居る俊寛の頬にも、朝の微風が快かつた。彼は目を開くと、自分の身體の上に茂り重なつて居る蒼々たる榕樹の梢を洩れる清すが々しい朝の日光が、美しい幾條の縞となつて、自分の身體に注いで居るのを見た。道に暫くの間は淨らかな氣持がした。が、すぐ二三日來の出來事が悪夢のやうに歸つて來、そして烈しい渴を感じたので、彼はよろよろと立上つた。それでも、縹渺と無邊際に擴がつて居る海を、未練にももう一度見直さずには居られなかつた。が、群青色ぐんじやういろに遙々

と續いて居る大洋の上には、信天翁の一群が飛交うて居る外は何物も見えない。成経や康頼を乗せた船が、今まで視野の中に留まつて居る筈はなかつた。

彼が再び地上に身を投げた時、身を焼くやうな渴と餓とが烈しく身に迫つて來た。彼は赦免の船が來て以來、何も食つてゐないのだつた。基康は遠に彼を憐れがつて、船の中で炊いた飯を持つて來てくれたのであるが、瞋恚の火に心を焦してゐた俊寛は、その久振りの珍味にも目をくれないで、水夫の手からそれを地上に叩き落した。無論今でも自分の小屋まで歸れば、乾飯も澤山残つて居る。が、俊寛には一里に近い道を歩く勇氣などは残つてゐなかつた。

烈しい渴と餓とは彼の心を荒ませ、自殺の心を起させた。彼は

目の前の海に身を投げること考へた。さうして、何故基康の船が居る内に死ななかつたかを後悔した。基康やあの裏切者の成経や康頼の目前で死んだならば、少しは腹癒せにもなるのだつたと思つた。今死んでは犬死であると思つた。が、死なうと云ふ心は變らなかつた。歸洛の望を永久に斷たれながら暮らして行くことは、彼には堪へられなかつた。二十間ばかり向うの岸に一つの岩があり、その下の水が殊更に深いやうに見えた。

彼が決心をして立上つた時、彼はふと水の香を嗅いだ。それは眞水の香であつた。極度に渴して居る彼の鼻は、犬のやうに鋭くなつて居るのだつた。彼は水の香を嗅ぐと、その方角へ本能的に走り出した。唐竹の林の中を彼は獸のやうに潛つた。十間ばかり潛つた時、その林が盡きて、其處から岩山が聳えてゐた。

ふと、其處に、大きい岩を背後にして、此の島には珍しい椰子の木が十本ばかり生えて居るのを見た。そして、その椰子に掩はれた鳶色の岩から、一條の水が銀の絲のやうに滴つて、それが椰子の根本で、小さい泉になつて居るのを見た。水は浅いながらに澄切つて、沈んで居る木の葉さへ一々に敷へられた。渴し切つて居る俊寛は、犬のやうにつくばつて、その冷たい水を思ひ切りがぶ／＼飲んだ。それが何といふ快さであつただらう。それは彼が鹿が谷の山莊で飲んだ如何なる美酒にも勝つてゐた。彼がその清冽な水を味はつて居る間は、清盛に對する怨も、島に只一人残された悲しみも忘れ果てたやうに、清々しい氣持だつた。彼は蘇つたやうな氣持になつて立上つた。そして、椰子の梢を見上げた。すると、梢に大きい實が二つばかり生つて居るのを見た。俊寛は疲勞を

忘れて、猿のやうに攀登つた。それを叩き落すと、傍の岩で打碎き、思ふさま食り食つた。

彼は生れて以來、是程の有難さと是程の甘さまで飲食したことはなかつた。彼は椰子の實の汁を吸つて居ると、自分の今までの生活が夢のやうに淡く薄れて行くのを感じた。清盛平家の一門、丹波少將・平判官・丹左衛門尉、そんな名前や、そんな名前に對する自分の感情が、この口の中の總べてを、否心の中の總べてを溶かしてしまふやうな木の實の味に比べて、全く空虚なつまらないものやうな氣がし始めた。

俊寛は口の中に残る快い感覺を楽しみながら、泉の畔の青草の上に寝た。そして、過去の自分の生活の色々な相を心の中に想ひ出して見た。都に於ける色々な暗闘・陷擠・戰爭・權勢の爭奪、それか

ら來る嫉妬反感憎惡さう云ふ感情の動く儘に狂奔してゐた自分の淺ましさがしみじみ解つたやうな氣がした。船を追つて狂奔した昨日の自分までが、餓鬼のやうに淺ましい氣がした。煩惱を起す種のない此の絶海の孤島こそ、自分に取つて唯一の淨土ではあるまいか。康頼や成經が傍にゐた爲に、都の生活に對する否、人生に對する執着が切れなかつたのだ。此の島を假の住處と思へばこそ、硫黃が岳に立つ煙さへ、焦熱地獄に續くもののやうに懶く思はれたのだ。此處こそつひの住處だ、あらゆる煩惱と執着とを斷つて、眞如の生活に入る道場だ。さう思ひ返すと、俊寛は生れ變つたやうな朗かな氣持がした。

ふと寢返りを打つと、すぐ自分の鼻の上に、撫子に似た眞紅な花が咲いてゐる。それは都人の彼には名も知れない花だつた。が、

その花の眞紅の花瓣が何と云ふ美しさと淨らかさを持つてゐたことだらう。その花をぢつと見詰めて居ると、人間の總べてから知られないで美しく薫つて居る、かうした名も知れない花の生活と云つたやうなものが考へられた。すると、孤島の流人である自分の生活でさへ、むげに生甲斐のないものだとは思はれなくなつた。彼は自殺しようとした自分の心の淺はかさを恥ぢた。彼の心には今新しい力が沸いた。彼は踴躍して立上つた。そして、海岸へ走り出た。平素は魂も眩むやうに懶く思はれた大洋が、如何に美しく輝いてゐたことだらう。十分昇り切つた朝の太陽の下に、紺碧の潮が後から後からと湧くやうに躍つてゐた。海に接して居る砂濱は金色に輝き、飛交うて居る信天翁の翼から銀の光を發するかと疑はれ、平素は見ることを厭つてゐた硫黃が岳に立つ

煙さへ、今朝は澄渡つた朝空に琥珀色に優にやさしく棚曳いて居る。俊寛は童のやうな伸びやかな心になりながら、兩手を差擴げ、童のやうに叫びながら、自分の小屋へ馳戻つた。

一八 俊 寛(二)

島に來て以來一年の間、俊寛の生活は、成經と康頼と昔物語から謀反の話をして、おしまひには、お互の境遇を嘆き合ふか、でなければ、砂丘の上などに昇りながら、浪路遙かな都を偲んで溜息を吐きながら、一日を茫然と過してしまふのであつたが、俊寛はさうした生活を根本から改めようと決心した。

彼は努めて都のことを考へまいとした。従つて、成經や康頼のことを考へまいとした。彼は成經や康頼が親切に残して置いて

くれた狩衣や刺貫さしぬきを海中に投捨てた。長い生活の間には、衣類に困るのは解り切つてゐた。が、困つたら、土人のやうに木の皮を身に纏うても差支はないと考へた。

その上、三人でゐた間は、肥前の國加瀬の莊にある成經の舅からの、平家の眼を忍んでの仕送りで、細々ながら朝夕の食に事を缺かなかつた。その爲でもあるが、三人は大宮人の習慣を持續けて、爲すこともなく毎日暮らしてゐた。俊寛はさうした生活を改め、自分で漁し、自分で獵し、自分で耕すことを考へた。

彼はさう云ふ生活に入る第一歩として、成經や康頼の記憶が附纏つて居る今までの小屋を焼捨て、自分で發見したあの泉の畔に、新しい家を自分で建てることを考へた。

彼はその日から泉に近い山林へ入つて樹を伐つた。彼が持つ

て居る道具は、一挺の小さい鉞こさかりと二本の小太刀であつた。周圍一尺もある樹は、伐倒するのに四半刻近くかゝつた。が、額に汗を流しながら其の幹に鉞を打込む時、彼は名狀しがたい壯快な氣持を感じた。清盛に對する怨などは、さうした瞬間泡のやうに彼の頭から消去つて居る。そして、その樹が鉞の幾落下に依つて力が盡き地を揺がせて倒れる時、俊寛の焼けた顔には會心の微笑が浮かぶ。彼はさうして伐倒した樹の枝を拂ひ、一本宛やつとの思で泉の畔へ引いて來る。彼はその粗こい丸太を地面に立てて柱とした。小太刀や鉞で穴を掘ることは可なり骨が折れた。殊にさう云ふ仕事に用ひることで、これから先の生活にどんなに必要であるかも知れない道具の破損することを恐れねばならなかつた。屋根は唐竹で葺いた。此の島の大部分を掩うて居る唐竹は、屋根を葺く

のには藁よりも遙に優れてゐた。樹の枝を横に幾つも並べて壁にした。そして、近所で見出した粘い土をその上から塗抹した。彼は自分の住む家を自分で建てるのがどんなに楽しみな仕事であるかを知つた。その間清盛に對する怨や、妻子に對する戀ひしさが、焼くやうに胸に迫ることがある。そんな時、彼は常よりも二倍も三倍も激しく働く。無論、島に夕暮が來て、日が荒寥たる硫黄が岳の彼方に落ち、唐竹の林に風が騒ぎ、名も知れない海鳥が鳴く時など、燈もない小屋の中に蹲つて居る俊寛に、身を裂くやうな寂しさが襲つて來る。が、晝間の激しい勞働が産む疲勞は、すぐ彼をさうした寂しさから救つて呉れ、そして、彼に安らかな眠を與へてくれる。

新しい小屋が出來た時、その次に、彼は食物のことを考へた。三

人で食殘した乾飯は、まだ二月三月は俊寛一人を支へることが出来る。が、成經がなくなつた今は、成經の舅から仕送りのある筈はなかつた。今は自分で食物を耕し作るより外はなかつた。俊寛は、新しい小屋から二町ばかり隔つた處に、やゝ潤けた土地があり、硫黄が岳に遠い爲に硫黄の氣が少しもないことを知つた。彼は其處を冬の間の開墾し、春が來れば麥を植ゑようと思つた。が、差當つては、漁と獵をする外に食料を得る道はなかつた。

彼は堅牢な唐竹を伐つて、それに蔓を張つて弓にした。矢は細身の唐竹を用ひ、矢尻は鋭い魚骨を用ひた。本土ならば斯うした矢先にかゝる鳥は一羽もゐなかつたらうが、此の島に住んで居る里鳩、唐鳩、赤髯青鷺などは、俊寛の近づくのを少しも恐れなかつた。半日山や海岸を駈廻ると、運び切れない程の獲物があつた。

今までの彼は、獵はともかく、漁はむげに卑しいことであると思つてゐた。只管に都會生活に憧れてゐた彼は、さうしたことを眞似て見ようといふ氣は起らなかつた。が、現在の彼は、土人に倣つて漁をして見ようと考へた。その頃の島は、鰻を取る季節であつた。永良部鰻は、秋から冬にかけて、島の海岸の暖い海水を慕つて來て、其處へ卵を産むのであつた。土人は海水の中に身を浸して、それを手捕りにした。俊寛もそれに倣つた。最初は幾度擱んでも擱み損ねた。土人は怪しい言葉で何か言ひながら俊寛を嗤つた。が、俊寛は屈しなかつた。三日ばかりも根よく續けて試みて居る中に、魯鈍で一番不幸な鰻が俊寛の手にかゝる。五日と經ち七日と經つ中に、どんな敏捷な鰻でも俊寛の手から逃れることが出来なくなつて來る。彼は何十疋と獲た鰻の鰓はらに蔓を通し、それ

を肩に擔ぐ。蔓が肩に喰入るやうに重い。が自分で捕つたのであると思ふと、一疋だつて捨てる氣はしない。小屋へ歸つてから、彼は小太刀で腹を割き腸を去つてから、それを日向に乾す。半日ばかり鰻を捕つて居る中に、小屋の周圍は乾いた鰻で一杯になる。その中に、鰻の捕れる季節は過去つて了ふ。そして冬が來た。冬の間俊寛は畑を作ることに一所懸命になつた。彼は先づ畑の爲に選定した彼の廣潤な土地へ火を放つた。そして、雜草や灌木を焼拂つた。それから、焼殘つた木の根を掘返し、岩や小石を取去つた。彼の鉞は今度は鍬の用をした。土人の所に行けば、鍬に似たものがあるのを知つてゐた。が、報酬なしに土人が何物をも貸さないことを知つてゐた。道具のない爲に彼の仕事は捗らなかつた。が、彼の精根はさうしたものに總べて打克つた。冬の終る頃

には、一町近い畑が彼の力に依つて拓かれた。彼に今最も必要なものは、其處に蒔かねばならぬ麥の種であつた。彼は麥の種を土人が手放さないのを知つてゐた。彼はそれを交易する爲に、自分の持物の中で土人の欲しがりさうなものを色々考へて見た。土人の欲しがりさうなものは、自分の生活にも缺くべからざるものだつた。俊寛はふと、鳥羽で別れる時、妻の松の前から形見に贈られた素絹そけんの小袖を今もなほ其の儘に持つて居るのに氣が付いた。それは現在の彼に取つて、過去の生活に對する唯一の記念物だつた。彼は一晩考へた末、此の過去の生活に對する記念物を現在の生活の必需品に換へることに決心した。彼はいとしい妻の形見を一袋の麥に換へた。そして、それを彼が自分で拓いた土地に蒔いた。

自分で拓いた土地に、自分の手で蒔いた種の生えるのを見ることは、人間の喜の中では一番素晴らしいものであることを俊寛は悟つた。仄かな麥の芽が碓礮な地殻から頭を擡げるのを見た時、俊寛は嬉し涙に咽んだ。彼は跪いて、目に見えぬ何者かに心からの感謝を捧げたかつた。

鬼界が島にも春は廻つて来る。島の周圍の海が薄紫に輝き始める。そして、全島には椿の花が一面に咲く。信天翁が一日々々多くなつて、硫黄が岳の中腹には、雪が降つたやうに集つて居る。

生れて始めての自然生活は、俊寛を見違へるやうな立派な體格にした。生白かつた頬は褐色に焼けて輝いた。去年中着續けてゐた僧侶の平服は、色々のことをするのに不便なので、思ひ切つてそれを脱捨てて、思ひ切つて皮かつらを身に纏つた。生年三十四

歳、その壯年の肉體には、原始人らしい總べての活力が現れ出した。彼は生え伸びた髪を無雜作に蔓で束ねた。六尺豊かの身體は鬼のやうな土人と比べてさへ、一際立勝つて見えた。

彼は時々自分の顔を水鏡で映して見る。が、その變り果てた姿を淺ましいなどと思つたことはない。無論、現在の彼には、妻子が時々思ひ出されるだけで、清盛のことなどは念頭になかつた。平家が千里の彼方で奢つてゐようが、ろまいが、そんなことはどうでもよかつた。それよりも、彼は自分が植付けた麥の成長するのが、一日千秋の思で待たれた。

(菊池寛)

一九 人麿と赤人の歌

足曳きの山川の湍の鳴るなべに

弓月が嶽に雲立ちわたる。

この歌は、柿本人麿歌集から出たものである。人麿歌集所載の歌は悉く人麿の作であるとはいへないが、これは一首の格調・風姿の上から察して、恐らく人麿の作であらうと思はれるので、今日では多くの人がさう信じてゐるのである。「足曳きの」は山の枕詞、「山川」は山中を流るゝ川、「湍の鳴る」は瀬音の響くこと、「なべ」は「まゝ」に等と意が略等しい。本來は「並べ」の意であつて、一の現象に並んで他の一の現象の現るるをいふから起つた詞であるらしい。例へば、日の傾くといふことがあれば、それと並んで蜩の鳴くといふこと

が起る。さういふ關係を、夕づく日傾くなべに蜩の鳴く」といふやうに連ねるのである。弓月が嶽は山の名である。この歌山川の湍が鳴つて、弓月が嶽に雲の立ちわたる光景を「なべ」の一語で聯ねて、風神靈動の概があり、一首の風韻自ら天地悠久の心に合するを覚えしめる。人麿作中最も傑出したものの一であらう。

東の野に陽炎の立つ見えて

かへりみすれば月傾きぬ。

人麿二十八・九歳頃の歌である。人麿は初め二十四・五歳にして天武帝の皇太子日竝ひなり知皇子ちみこに仕へ、この皇子早世せられて、その御子輕皇子が後に文武天皇とられた。日竝

知皇子薨後四年にして、御子輕皇子御年十一歳にして安騎野に遊獵せられた。その野は、御父日竝知皇子も曾て遊獵せられた野である故、皇子にも扈從の群臣にも甚だ思ひ出多く感慨深い遊獵であつたらしい。

人麿も扈從の一人であつて、感慨を一首の長歌と數首の短歌に寄せた。その短歌の一つがこれである。古への旅は、高貴の御方と雖も、旅寢するに小家を構へ、茅を葺いて假りの宿りとせられたのである。況して舍人であつた人麿等の假りの宿りは、雨露を凌ぐにも足らぬものであつたらうと想像される。これだけの背景を置いて此の歌を見るといい。陽炎は光の動くものであつて、こゝでは東方微白

を呈して夜の明けんとするを言うてゐる。一首の意明瞭である。草の枕から首をあげて見れば、東方の空に微白が動いてゐる。あたりは猶月の明りである。顧みて西方を望めば、大月將に落ちんとして猶空の一方に懸つてゐる。境が偉て意が遙かである。是を貫くに音調の高朗を以てしてゐるから、天地清澄にして枕頭霜の結ぶあるかをさへ思はしめるに足りる。

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば
心もしぬに古おもほゆ。
人麿二十四歳にして近江の本居より京に上つた時の歌とするものあれど、小生は歌柄から推して、それよりずつと

後の作であらうと思つてゐる。人麿の父祖は、世々大和に居つたものであるらしいが、近江朝廷の時、人麿の父が一家を擧げて近江へ移つたとも思はれ、人麿の京へ出仕した後、時々衣暇えいげ・田暇でんげ等の公暇を得て近江へ歸つたらしく、さういふ時の往復に斯かる歌が生れたのだらうと思はれる。恐らく三四十歳の間に出來た作であらう。

先づ「夕浪千鳥」はいかにも寂しい心持の現れた詞である。恐らく人麿の造語であらう。「心もしぬには萎れる意である。淡海の海の夕浪千鳥よと呼びかけて、お前が鳴けば心もしぬに萎れて古が思はれると、志賀の舊都を追懷するの意を千鳥に訴へてゐる心甚だ哀れである。一首全體の音

調が「伊列音」を多く交へて、度ましい響きに終始してゐるために自ら哀韻を帯び、更に第一句切れ、第二句切れの重々しき句法を重ねて、それを第五句八音の字餘り句を以て結んでゐるために、頭負けをせざるのみならず、全體に莊重の心持が現れて、各音の持つ哀韻をして單なる感傷に終らしめてゐない。この邊の機微皆作者の主觀より生れ出づる所であつて、形を以て摸すべからざるものである。その邊の消息を我々は考へて見る必要がある。

山三吉野の象山のまの木末こゝろには

幾許いこほもさわぐ鳥の聲かも。

神龜二年聖武天皇の吉野行幸に、赤人が從駕した時の歌

である。「象山のまは」象山の際であり、「こぬれは梢であり、こ
こだ」は許多である。一首の意よく通じてゐる。境は吉野
の山中で、耳に聞えるものは木末々々の鳥の聲である。一
首の意至簡にして、澄み入る所が自ら天地の寂寥相に合し
てゐる。騒ぐというて却つて寂しく、鳥の聲が多いとい
うて愈寂しいのは、歌の姿がその寂しさに調子を合せ得るま
でに至純である爲である。試みに、第一句より第五句まで
を誦して見れば、それが如何に至簡な力の進行であるかが
わかる。直線であるから寂しく、寂しいけれども勢があり、
勢があるけれども、それが人麿の如き豪宕な勢でなくて、度
ましく潜んだ勢である。これは、人麿・赤人の特徴を較ぶる

に根柢的な對照をなすものである。特に、この歌第三句ま
で天仁遠波のを疊用して一首の勢を呼び起してゐる所が、
曩の人麿の「足曳きの山川の湍の鳴るなべに」の歌に類して
ゐる。兩者の比較は甚だ興味がある。うばたまの夜の更けゆけば久木生ふる
清き河原に千鳥數鳴く。
靜肅な感動と、その感動の現れが前の歌に通じてゐる所
がある。やはり赤人の傑作であらう。久木は今の世何と
呼ぶ木か明瞭に分らぬ。「木さゝげ」説もあり、「くぬぎ」説もあ
る。「しば鳴く」は「しばく」鳴くことである。前の歌と同じ
く一讀して一首の意明瞭である。第一句より第三句まで

押して行く勢が異常であつて、一種澄み入つた世界へ誘ひ入れられる心地がする。それを第三句より第五句まで連續した句法で承けて、最後に「千鳥しば鳴く」といふ引き緊つた音で結んでゐる。暢達の姿があつて軽い滑りにならぬい。一首各音の持つ響が度ましく緊つてゐることが、更に一首の感じに大きな影響を與へてゐる。その邊を翫味せんことを望む。

田子の浦ゆうち出でて見ればま白にぞ

富士の高根に雪はふりける。

赤人の有名な富士山長歌の反歌である。田子の浦から汀づたひに出て見れば、富士の高嶺に眞白く雪が降つてゐ

るといふのであつて、何等の奇なき所がこの歌の大柄にして富士の大きな姿を現し得てゐる所以である。平凡の如く見える所が、天地自然の心に合してゐる所であつて、この平凡は、平俗を意味する世上の平凡とは違ふ。誦すれば誦する程、長河の海に朝するが如き勢と力とを感ずる。「田子の浦ゆうち出でて見れば」と強く係つてゐる勢を受くるに「眞白にぞ」と起して、そのぞが第五句「降りける」に入つて始めて止まつてゐる勢を思ふべきである。

赤人の歌は、實は、人麿の雄偉な姿に比して、度ましくして内に潜む側である。その點に於て、この歌は、赤人の歌としてやゝ異色あるものと言うてよい。

(島木赤彦)

女子新讀本 卷八 終

大正十五年七月十五日發行
大正十五年十月十二日訂正再版發行

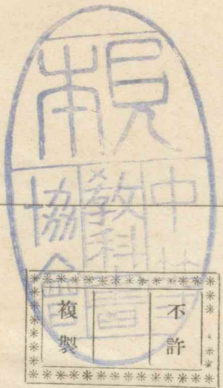
昭和三年度臨時
定價 卷一、二、三、四 各金四拾貳錢
卷五、六、七、八 各金拾八錢
卷九、十 各金拾七錢

定價 卷一、二、三、四 各金七拾錢
卷五、六、七、八 各金六拾五錢
卷九、十 各金六拾三錢

印刷者 高橋 郁

發行所 東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
振替口座東京二九五〇七番

至文堂
電話青山 四三五四番
四三四三番



大正十五年七月十五日發行
大正十五年十月十二日訂正再版發行

女子新讀本

昭和三年度臨時
定價 卷一、二、三、四 各金七拾錢
卷五、六、七、八 各金六拾五錢
卷九、十 各金六拾三錢

著者	久松 潜一
發行者	東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 佐藤 正 叟
印刷者	東京市京橋區弓町二十五番地 高橋 郁

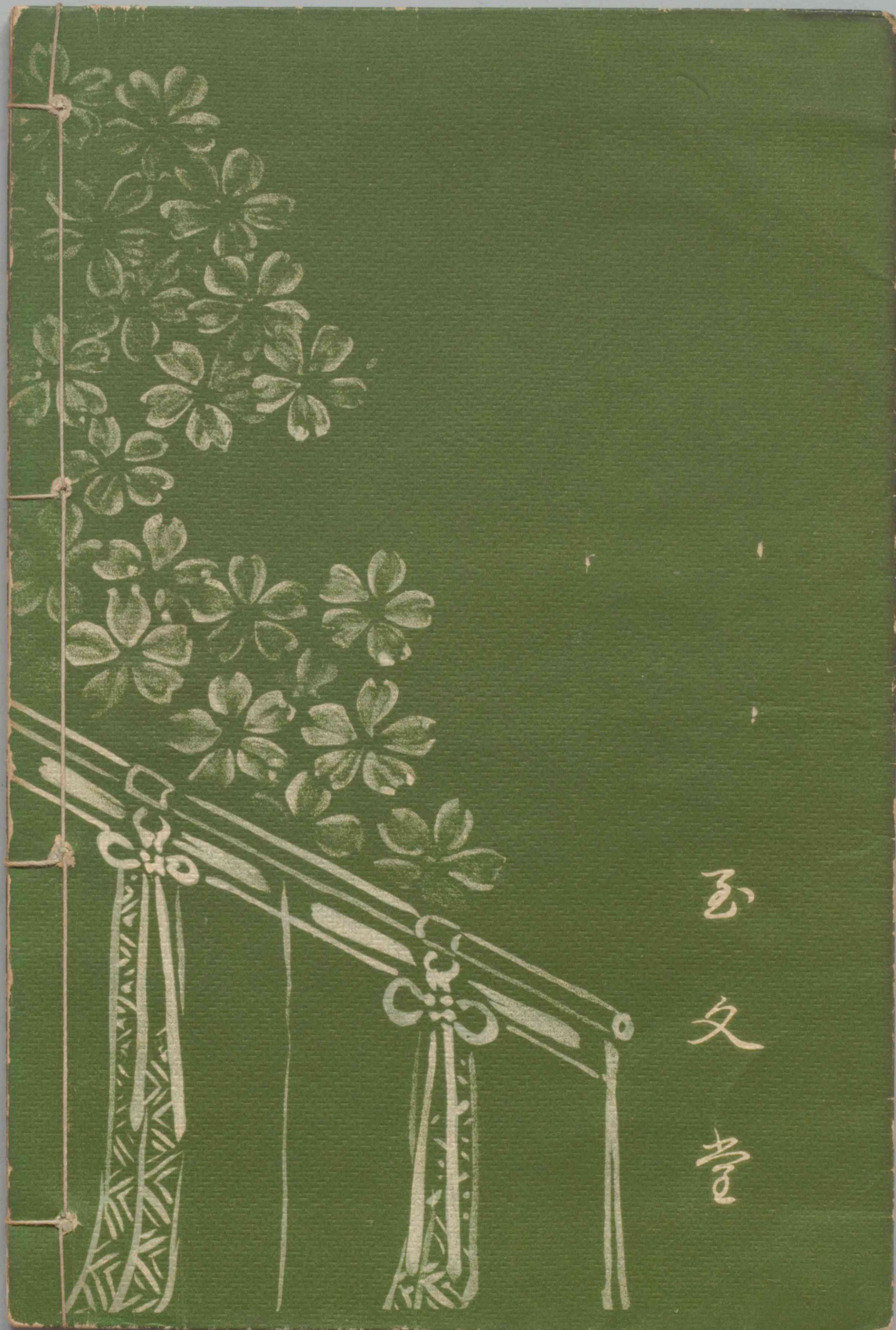
發行所

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
振替口座東京二九五〇七番

至文堂

電話青山 四三五四番
四三四三番

弊堂發行教科書は供給差支無き様に澤山製本出来準備致して居ますから若し貴地書店に品切れ等にて御差支の節は何卒弊堂へ直接御注文下さい直に御送り申上げます



玉文堂